羣書一覧 三

物語 草子 日記
和文 紀行

内閣文庫	
番號	和 8949
冊數	6 (3)
函號	261 14

国立公文書館
National Archives of Japan

群書一覧巻之三

物語類

竹取物語　二巻

ふるきものがたりのいできはじめ乃おやと源氏にいへり竹取の翁といふもの竹の中より見女をえて養育し家富さかえてのち天女となりて登天せしことを記しけるものなり此を竹取と名づくこれらは萬葉集第十六巻に竹取の翁九箇の神女にあひしことありけるによりけるにやとぞいへりされどさはあらざるべし○奥冲の河社にいはく竹の中より人あること内外典にみえたり宝楼閣経不空三蔵訳弘法大師将来第一に云併言乃住古昔乃至有一仙人云々時彼仙人得法歓喜心生踊躍於其住処便捨身命所捨身猶如生酥消融入地即於没処而生三竹金為茎葉七宝為根云々其竹生長十月則自剖裂各於竹内生一童

子ノ顔容端正ニシテ即於是時竹ノ下ニ結跏趺座即入定至第七日於テ其ノ中夜皆成正覚其身金色三十二相八十種好圓光厳飾時彼ノ竹皆変成七宝楼閣ト云々經ハ男子なるを女子となしかへられけらしてかきいだせり又後漢書西南夷傳にも竹節を剖て一男子ありしよしいでたるかくや姫のなハ古事記垂仁天皇の段に云又娶大筒木垂根王之女迦具夜比売命生御子袁邪弁王これとおなじかくや姫となづけみかどの五人がいひよりしふみ又大納言をうちきみハ文武天皇の時代の賢右大臣大伴宿祢御行これなるよしいへり○此物語の作者なるよし書目に源順とかゝれども明證なし

竹取物語抄　二巻　小山儀

和漢の書をひきて注す入江昌喜注書を附す巻末に此物語の作者源順ならずといふ辨あり天明四年八月於惟寛漢字の序入江昌喜かれの序あり天明四年四月刊行す

宇津保物語　二十巻　三十本

此ものがたりハ源氏物語絵合の巻にみえたるはうつほのとしかげの巻をゑにかきたるよし○清少納言枕草子に物語ハ住吉うつほの殿うつり国ゆづりハにくし月まつ女かたのゝ梅つぼの大将人め國ゆづりむもれ木道心すゝむる松が枝こまのゝ物語云々○源氏物語下ニ云巻のなかしびのうつほのものがたり等ニみえたりしび春日まうで五月五日の巻のならびまうでつひ菊のえんなどあり○源義弁引抄にうつほの物語二十二巻源順の作といへりかの時の真図ハ乃ち此時代をあげたるよし下しるす

蔵びらき　四帖上中下　楼のうへ　四帖上下　菊のえん　二帖上下
藤原乃君　一帖　沖つしらなみ　一帖　たゞこそ　一帖
吹上　二帖上下　祭乃使　一帖　内侍のかみ　三帖上中下
梅乃花笠　一帖　初秋　二帖上下　俊蔭　二帖上下
あてみや　一帖　[illegible]　五帖上中下

書目にかくのごとく巻々の名ハあれども其次第定かならずといへり[illegible]

刊行(カンカウ)せるは本居宣長が玉かつま中にいへる如く俗本なれば今は世の板本は巻の次
なかばはうちみだれたりよく正しがたし田中大秀がふ
るき本かうがへて正しくしるしたる次第ハ

第一　俊蔭(トシカゲ)　第二並　藤原君
第三並　たゞこそ　第四　梅花笠 一名 春日まうで
第五　嵯峨の院　第六　吹上の上
第七　吹上の下　第八　祭のつかひ
第九　菊の宴　第十　あて宮
第十一　初秋 一名 とをうの名月 一名 すまひの節会
第十二　たづのむらとり　第十三　藏びらき上
第十四　蔵びらき中　第十五　蔵びらき下
第十六　楼のうへの上　第十七　楼のうへの下
第十八　国ゆづり上　第十九　国ゆづり中
第二十　国ゆづり下

かく改めしるす合せて二十巻なり然るに今の世本には嵯峨院の巻の次に蔵び
らきの下として吹上の巻は上下のつゞきを謬て藏びらきは下にて國ゆ
づりの下とし楼のうへの巻は上下のついでをあやまり國ゆづりを上と中とし次
第は誤りて國ゆづり下は嵯峨院とすこれらみな誤りなれど今の世本の藏び
らきの下はまことの蔵びらきの上にて下はうしなひ國ゆづりの下は藏びらきの
下とし楼のうへの上は下下はうしなひて國ゆづりの上は中中はうしなひてさきのかんは國ゆ
づりの上としるせり又今の世本にはそのうしなひたる一巻なる物もよにありけ
ればそれを中なる物とみえけれども今せる二十巻とせりそれのみ
き一なるよしかきのこせる物第十一とし初秋を第十二とし國ゆづりを
三巻とし第十六第十七第十八とし楼のうへの上下を第十九第二十とせ
るこれらのついでハいかゞあらんまだよくしらずすべていかで
えらんも考へ定めんにはこゝにかなはずめでたき本の考へをも
用ゆべし尾張のふく人浅井の某が此物語にのみくはしく考へ
置けるよしをきゝたるにまだ見ず ○按ずるに契沖の河社には

めでたきこと代々の物語におほく侍せり

宇津保物語俊蔭巻　三巻

別刻なり此書は巻の中の一帖をとりて別にいだせるなり全部にさきだちて
まづ此書を世にあらはさむとてなり○此書は源氏以前の書にて
おもむきはめでたきものなれどいまだ世にひろくはしられず又
此書はむかし板刊行ありしとおぼしくぞ

濱松中納言物語　写本　四巻

作者つまびらかならず中納言なる人もろこしにわたりての後の事をしるせり
ひとりみまかりけるゆゑをも書あらはしたるに又一巻あり中のさまは
日本の濱の濱松にてひとり横笛を吹しことありて名づけたるにや
これよりなづけたるなり○此書をのぞけばよりのがれ
さる内侍のこのひきける琴のしらべなり○又かの一巻の
おほよそ四巻のこの物語にて○二根集　荒木田守平之充院夜殿中書
のせし物語にもはじめ四巻のものがたり八巻よりぞ濱松と

住吉物語　二巻　三本

作者詳ならず古写本二巻なりひとつは一巻刊本は三巻にわかてりむ
かし中納言なにがし殿の一人のむすめありけるをまゝははにくみて住吉
に隠ししを少将たづねてつひにむかへとりけるを語れり○按ずるに源氏物語
蛍の巻に源氏物語八住吉の物語のいへる事ありて住吉物語
二巻ありとも十巻ありと源氏物語細流抄にいへり二巻の住吉物語
よみしか○今昔物語にそのころ此すみよしの事あり八人あつまりて女房
あまたしのびて住吉の姫君の物語をかたり讃するとぞしるせり又き
これらをもつてもいにしへより此物語はあまねく世にしられたり又印本に出
とあるを見ればむかしより此物語ありしは明らかなり○伴
蒿蹊云此すみよしの物語は今世にある本とかはりて昔の物語
古人の作にあらず出来しくは一條院の御時のころ人の作り
かけたるにやあらむとかの世にはいひつたへし近き世のものなる
ともいへり

伊勢物語　二巻

此物語作者のこと古来より伊勢の御といひ又ハ業平と勝劣のさだ
も撰澄すなりいへども古書とも撰考へ此物作が熟読するに業平の
自記ならいせの書綴れるより説あれどもさだかならずひとつとするに足し
○契沖云此伊勢物語ハ在原業平朝臣の一生の事をあつめし題号の
ん弁り作者古来不明の説なし定家ハ奥書に若事只仰而可信又
云上古之人強不可尋其作者唯可翫詞花言葉而已又此詞肝要なり
尤是なるべし此号代々いせと名付るよつて今案する堀河院後
百首に蒼京忠房池城をあまとは
いせなりとひなにもやまとなしやまとのかの心
これもしより伊勢人のひがことなれせいひなるまくよみたり
ともの又西りよ人の山家集にもいせ人ハひがことしけるよ
よみつるやう作者謙退しく此をまことろあつむる事
めくひがしまなへしとや名付るも清輔朝臣の袋草子に

その撰人作りしならばもとより此説実たるべけれど作りけるにや○真淵云いせ
物語と名付けるハ是を説とするハ誤なり荷田東万信大人の
説に伊勢と云ハ物語作なりしすなはち伊勢斎宮の事をも又来るのいせの
事を云ひて仍く名付けしと従ひがたきをやすくいはんハいかが
の名おほくいふことなれど其作者のとしやかなるをよむあり
其上時ぬきし大和物語ハ今此京の事大かたをおほく大和の事
そあるしも然にかきおきて大和にもあづけしことのしもかなくも
わりよつきいかなるを今よりつくるれうやすき事いつくもつてみえひ
といふハ清輔朝臣の袋草子に見ゆる有義なり又此摂僻事と由謂ひ
伊勢物語は伊勢ハ僻事とまた二つの書を以て一つ作を載する八田畑
のたとへひとつの奉しハ時代をわかちてしたがひて騰蒼
よろこびハなれ本ハ万葉の時なれ古今の時を取て一首の
歌としてハ古歌の一言一句を取てつく意なしあるハ今々あげても
心の前にきつと美しきものともしよせ歌ハ古人をよまし時代歌後

乃次序抔もたゞ一つならずしけりとおもふ僻事なりしかぬハいふべけれしされハ
ひとつよみもていせのうたといふかたりにていせよひとつこゝと
とるみえあるハ堀川院百首によみても鴨長明らあるは
いせんハひとつとしけりはあかり甲斐にゆけさいりものこゝろ
み西行法師も
いせんをひとつとしけり業の無るかしてよみをこゝろへれ
きりようこれいせよ僻事ならし一語にけるハまる閑老のよる昔伊勢人の
んハいふさるしく親子兄弟のこのとをまちてよ掠めしかしかぞそよ
まゝ今昔物語にえるさこれを今あつむ後はよくやのるたひかなはよ
ゞくせらのつりしも式としけやよみの歌もの奸さおおさかつのかおり
サ系としてつのいせんかひすりもりとひもやうりん○古く行く伊勢
乃言字抔男女のまとしく惑ひ萬象これひよりり和合してせく
ゞおも和合ゆ夕のそしかゞ説くさまち妄りにさるして伊ついつ今
まつくりしず○定家の自筆の一本あ田なしの數ちうつくく合ゑ

本邪用捨也可備證本ニ近代以猶使事為端之本出来末代之人今案之
更不可用之此物語古人之説不同或稱在中将之自書或稱伊勢之筆
作就彼此有書落事等上古之人強不可尋其作者只可翫詞花言
葉而已　一部尚書判　○一華堂切臨ちる武田本の中ハ百四代よりさきつ
院の勅ねなり故百ら代は奈良院の代よ能於白山修理大夫入道徳
胤と称る院府并万里小路内府所取次をもく中論りて其ほ一乱の時
よ紛失し越前の朝倉入道宗順求出して若狭の武田伊豆入道紹真
こゝられ於付へけり故よ世に武田か本と号す其後も好修理大夫長慶之
恵を付へてり彼人没は同於傳へ天正十六年仲和の際より求出て
細川玄旨今ありすお定家自筆のか今の世に残るしは以前のなし
○みな天福の本八百四代はまたのより西三條道遙院所持鏡のうと
宗長所使して駿河の今川氏親へつかはされ時に実隆公の子よ
つねちふ今いてかきていせの本の本なきしうらてし将しれ
道遙院より駿河へつかはさしけるも一字不違よ書写せしか今よ西

殿に仕へて其ほとに氏親の母ハ北条の伊勢伊勢守か女なりしかハ小
川殿といはれし駿府にありしよりの道達のふかく時節の景気を
いみ利させりとて其まゝ一世の後悔ことゝ今川了俊
より十二代めの氏実より甲斐信玄へ付されし甲斐乱に失ひぬ先
祖ハ常に駿河にありしゆゑ鬮疑おの葉ハ大に倦あり○今案す
るに枇杷左大臣仲平公の子なりし時よりのかく伊勢のかくかよひそやさ
まつゆるり此へかよりし公と臨答のとき是より也なりけりと
これらをとあやかりくいや業平とのとりしのとて此あたりの化
堵の塗よりなりしりつ伝説もよきへし

真字伊勢物語　二巻　六条宮御撰

六十二代村上帝第八皇子六条宮具平親王の御撰なりといひ伝へて六
条なしとも号せり此書の真仮名を用ひしず加茂大明を先とす古本
あつさく真字にて書しより其文字の身かたまて万葉集ともそひあり
もし八新撰万葉にようにくうかゝれもなぞれる書ぶりなれし

いにしへとうれしく人のきまくく文字をもしらひ事も嫌らけしかしば初より真
字ようけるしりかけいかで字数のおほくやすきのこそてハえよみわきま
しがたきところなど仍てわざかれそしめハ仮字なりといへばきゝのぞくうつりて
きていくほどもなく字かず少なくより伝くる代々にさありそといま
仍て五百年ちかくのなかにおへしるよ今代なりハいて字代におよぶ所よ
も仮名文字にしずまく書伝へてやはらかんとするゆゑに不具なし殊に
あつまりの大人も古本眼用のかたり今もうるむ所もあらし解て
たまくしハ今中ばとくありうれ古かのくしめに六条の人御撰しまる
せりしハ村上天皇の皇子二品中務親王具平親王にて御撰しける
ものなりけるのなうかれ其親王の作りれたまへてよりいまへしずいふる
おほよそ人々化ならるもん親王の真字に書なしれたまつれりといふ
いふまかなれを此ころ村上の御代の末康保のはじめれなまつれり人々
これハ此まへハ円融御代の初め人の手もとりれて此御代やうなれ
らずさく冷泉帝円融の御時よりなかに體もかくしずして老く伝し

なきものゝ人はまよはずなどゝいひ今までしるしおきて持よの所
代のまゝにかきしるして只親王のいと幼稚なりけんほどよあらく
書きしるし給へるを後の人向ふにすべて御所がきとふ記者のなの所
とせり男は他にたえずとすれとりてさる御手とも丈夫はなの所な
のみ見ん且人とちがふて心めもうつめれども女のなけも拙うてはつれき
所つゝむめれど女はいかに名所はなをさずいづれてつきてもなはさる手
まじきものとしかれどもすこしもいふべくことのなるゝの他者やも
ひくひめなるはゆくなるまじくさなふゆへはいまだの真字なを
よりて今の語言も作るは久しく作字が作りけるゝ思ふ所にあね
なりけり按合しくるべし○本居宣長云へるはなのにまことな
ものせしなはりけの方家のまじかにひとくし真字しくえてこもの
六條のみかど撰したまひるあけなれどもその親王の御手ちぞとしくまて
ゆけどうしぬ伝てそねはそのしまりすゞるは字のならでざまいうぐ
なりしてまさゞけかし必ずしもずんぞぬるゝはみゝそうるゝ中の

劇うの辛労 指之血及後なり やまとうけるはなをかれうき一方
なふりのかたひくはり又東の熱向のうけて迎利なりまさでも
清濁しうれが通し玩ゆるべき物なれど讃は何の字か音ひろ
よ称しよ語の字は身ひとつずひはんのずものゝなりけるゝ
うり思恵流なしつか給江久ぅへりしくかずのへともこれはつうき
身なうこれはやかずのをとをやまりし辞と面親しとこと忘れの
者撮とみゆるべしこれらの假字は今の世としてもそこむほどのも
のかずみをとりしあやまりしたることはたまくあやまるはあげるの
うゝやうはもとききしまりぬえせすのまさずて尺ろくは真字はすべ
てとりずるまのしまうは作まてゝ詞のあの假字なりしてえべ
て老ひるなかびひさきとあしまそりしてうれとのあしまりてよ
けやのよまゝもすゝれりしずうとなぞこれもむしの一例のあかり
しかはよあえ字は書なうしてまるまへきされども今もつかふべ
うかまへきこのなりまいることいふれぬてまへはまず縣居の大人の

このごろ板にゑりたるものゝつねの假字なるをハ今なるもひ
ていつけよろしくしくも眞字なるは古なるもゆゑいとくちをし
くはあるべくもあらんやしかしいまひとつもすなはち世につかふ眞字
なあの他さらに同じてハいかあるべしといへどもこゝにことのあるの
みなこ〇こゝにても借すゆゑなのこゝろ假字の事にいふべくあるく
よろしくきなどいまかしこれんとてたしかにあるとこゝろうし
ぞし〇今此刊は寛永二年九月にあらす

舊本伊勢物語　二巻

綾太理校訂のものにて舊板にてその古きかたちなるをのこしてものゝ本
まことしく用ゐしなどつたへしハかき物とせりとしゆゑにおほく
六條なる同じくおなじくきれ老いしくく上本やしようし〇考異
上下一冊に附すされハ備なる異なる六條なるおなじもちらくいふ
もれなるをのハことなくはつめ何のかどひめされるなりてもなく
老へいくでこものハおなりの末なるに金龍雄杜多序同云七

月刻〇本居宣長之近ごろ此人の出せる舊本よりよりて眞名の本
も同じく上ハその刊にみえてありしを大かた今此本にあり
て此世の人の見おほしびて字と此をあふげおりとなれども
まとの此のきにかなへりやうで出せる人のみなり此本をきこえ
るけるまゝの本元にあれど今乃本にならずその書なりハすなはち假字の
假借ハともかく差別なく用ひて此等ハおもしく假借をもち
てみえかれずこハ此く古学にてあり此本にて此の人なりしではさりえ
ぬしあまとしみえ刊なりといふ五言なる句なるにそなへるとなれ
もしくかしこみて五のうしいふハ小を此五言といひ我のうちと
和哥の術を多藝十一日なり十麻理比止日といふハなくいひて今此世の
古学するその古語とおもひそれよりたゞハ世にのぞみて五本
て此のみの成さやうなる時代の事を考ひとつにさりとさ
なり十一日なりとのひとつけハなかりて八十一日とかくあるかくれ
なりなるより此あるなるて古学者の考ことの見えし此のうと

いそぎてハさすがにいふことのしひがたさかなしき文りよみらの
くだりよのつ〇のなべてハ作り者あしけりとゆへとかやまた作り
者仁逢有りし仁て辞をまてかくしもいふことの雅言の例をあつ
め今時世の俗言のこらしらなりけるもひがごともとりしやうれまそ
いふことぶりはさらにありがたくおもひこそ御や

伊勢物語髄脳　写本

これハ定家卿滋春が作のよし序などにも見えしてかくれもなう
ことやよそおもせて中比の偽書なりしていせの二字ハ男女のことし
きかせり滋春ハ業平の男ぶりしく父代々に作りつくて七箇條の
髄脳だに撰みしけつこうの書に男女相合のことを頃ぐく天下
萬象五行四神をも孔伊勢しかとさへするも無説りといへず
これらばかりのかたりの古説により己の丹ながら作りこれみなく
せりし帖になくこれハ大師かゝ従信その手作しけひ作てかたの本く
此一條禅閤の愚見おも傍じて是その知顕集に業平中将ハ事を牙頭

故ニ音小町ハ如意輪観音の化身とあり甚外胡乱なる事のしし
これハ伝世よりごの人々ごとの説へうそんとあまり後信じのものが
ありく擬作せしやうぞとて作りまこれ後者の手に作なりしとぐ
定家ではなかりぬるハなさりしそ此ありなれ名残らしめたく
このおもりかけんや作りしずいふ君作じられざるし〇移するは髄
脳もいまだ定家の偽書なればなるに信用すべからぬものなりけず

伊勢物語抄　写本　十巻

切臨みえずけ十巻の物語人のかきしてもあらず相伝の家訓とある
ほかの奥義のしるしひろまるこれは披見するもの来歴とりの
せさる和学の書典としく実にるおも昔物語のもとのいしと
おいのしなしず詞も言葉の便りもなるざし未学のものいおぼ
く信用すべきにもあらぬものなりけれ

伊勢物語愚見抄　五巻　一條兼良公

巻首よ知顕集の偽書なりしといへる作者のなり　万葉小集にてあけし

のせたりなどの論 業平の小伝なと編入たり 巻末に三代
実録の業平の伝 定家の備中の奥書あり○此板は花園院長禄
四年に成ぬとあり一切経が集たるよしあり○寛文十二年二月刊行

伊勢物語宗祇抄 一巻 二本 宗祇法師

此は旧名宗祇山口記といふ奥書に此一冊者延徳三初防州山口
にして此物語の講釈の時初心のものゝ為に不審の所を記畢書す
とて寛文八年三月に城春意が字の序あり

伊勢物語惟清抄 写本 一巻 舟橋宗尤

外記舟橋環翠軒宗尤西三条道遥院より相伝の説を記し
たるなるし

伊勢物語肖聞抄 写本 二巻 釋肖柏

は称名院の作字牡丹花肖柏此ところの聞書のをもとゝし
以て人はすなはち肖聞抄と号せり

伊勢物語闕疑抄 五巻 細川幽斎

中院也足軒素然の奥書あり此闕疑抄は幽斎老新作のよし上旨熟覧せ
られしより 慶長二年孟冬○跋にも此物語の抄出多くあれどもいづれ
も聚葉良材なきのみ也いたづらに八条の宮文庫の諸抄古注多くありけるを
べきよしかしこき仰ごとありしゆへにしたがひてたてまつりしよしかりて
ろしもたちうる記録されけるに先代の内府より給はりしよし記あり
長岡にいふかく此講釈ありしに其本残りとじてありしを思ひかへりて
御内の厳命より予が外祖父環翠軒宗尤道遥院より悉聞せしと
惟清抄とかづけ侍りし 即ちかの熟抄も有余不足抄もき出しとて
侍りしかば是なるんよりくれやひきあやまちくしつけ侍るも
くは陬栗恵雲院及大覚寺准后義俊 西院准后道増よりも
宗養紹巴などにいうくけたまはりしを加えしく悉く是は肖
は我等代法もなさせ候ての後によそひくことよからし侍 論
語と多聞闕疑慎言其余寡尤といへるく闕疑抄もてはおもふ
のを千其かのはかくりやしかもいうべきもの○時文禄五年仲

春十五日まされにいふもの也

伊勢物語難義註　写本　一巻

作者しれずしかれどもすけのぶがたれ中にもあまり疏多しとさまざま
とも所見えず巻末に脱簡あり

伊勢物語初冠　五巻　加藤磐齋

此書ハ闕疑抄なるがしら書くわしくて初冠と名づける
なるべし巻首に大略の論あり冷泉流の伊勢物語にしたがひてもとく
はじめに七本をたて一つにハ業平自筆の本二つにハ具平親王の本三つにハ安部
の弘安四人賀茂氏内侍の本五つにハ二位の尼の本六つにハ伊勢が中書
の本七つにハ長能狩使の本しるされたり一くわしく物語多く見えたり頭の業平朝臣
みかハ普通のものをさく物語多くし安部の弘安が本まいらばいつのりり
めハなけ立てもあこまず浦のさず初のことし定家卿の内侍が本ハ弘安が本
ようくほどのうりぬれしこれハ焼失の本とし狂おきるてまおくそのと
へいつらしらい位の尼ハ業平四代の末なる高階成章がむすめしられ業

平が自筆の本と少しもかはらずつてのなれ長能が狩使の本とす
伊勢物語細議(サイイクワ)ものそじめるけるこれハ和歌院の時此物語は秘蔵して
長能ハ冷泉家に作らく随聴(ズイチヤウ)されつらそもくめりぐめきあるめなれて
つむ何く塗籠(ヌリコメ)のをりくそは長能此なにも秘秘よりく神祇(シンギ)ごつ
つくらみ使の本し名けく代家の宝しせりうて○大略の本に承應
五年にれ東山建仁寺書記食旅僧(スコツジヨクリヨソウ)磐齋しるし自序(ジジヨ)にあらうの
詞(コトバ)そかにかりくけると行る人世多のるか鳥丸資慶(スケヨシ)卿につくしうびし
よくらみよきとよの作し序なるづいせりのぶつれ詞の外ハ云も
さびしくおしし義(ギドク)おかりくほめさせ多りしをぞ○万治る

伊勢物語集註　十二巻　一華堂切臨

庚子刊りす

此物語乃新註ハ兼良(カネヨシ)公の愚見おもなしめしく先達の末書(マツシヨ)をも
中ま近来世までありける闕疑おかりこれおいしきよ書写(シヨシヤ)のあやまち
てとめく文相伝の正義(セイギ)かいまうしとしせりさまうにかれし西三条内

府実隆公より老明一華堂乗阿へ伝へ玉ひし奥書等も有し
よしく皆物語へ書し条とも一あつめられし事古博士の切臨時の
序ありし御口まへの年九月の跋あり○此書すへて十一巻の要を集め
十二の巻ハ古注物語の説大意雑説真名伊勢物語等より抄出せ
る也○延宝二年刊行す

伊勢物語勅講抄　写本　二巻

明暦二年八月　後水尾院御講釈の聞書し御聴衆ハ妙法院宮　聖
護院宮　飛鳥井大納言等なり八月廿一日より九月廿九日までいかにも十二座
にして御法講なり初日御講釈の次第初段むかし男ういかうぶりし
ての一段御文字読ありて詠歌大概を殊にみかたらふべきハ今伊
勢物語は撰拾遺と十六人集の内にもよりて欲ありと見えしるべ
き次に定家の自筆の本にかつより此流の奥書御講釈次に初段の
むかしおとこうひかうぶりしての段までよみて御らせし九月廿九日御
後又の時ハ百廿四段おりけりといふまでよみつくし御講釈し

○此書奥書に云る并一段物語以て抽出しくれしより

伊勢物語拾穂抄　二巻　五本　北村季吟

惟清抄肖聞抄玄旨抄宗祇抄等の注抄取捨して諸注の中の説を
とりて玄かしらがきとす此書　後水尾院の叡覧を経たる也
よろしせり拾穂ハ季吟の軒号なり

伊勢物語臆断　写本　四巻　沙門契沖

古注新注ようしくせず契沖自己の意を以て粗すいりく解の一なり
せりかへし○巻首ふるい世をのべり八在原業平朝臣の一生の事
伊勢物語を書り作者ハ作れハ伊勢がかけるに○同じく云ふ作
者の説にいかて尊ぶべき二條后は即位の時古今集には
ほのめかして詠物とへハつねに于かしそのにはしりりけれど二条
后ハ延喜十年までおはしまさざりけりいかにもかくもいふべしとかす
と二条后ハ寛平八年に后位を停められ天慶六年に后位に
位に復したまふべきにあらず二条后としるさば古今集など

二条后としらせて彼もはれ人のあしなみけるやと抄じてハ批
把殿ハ承平八年にかへるく左大臣としハかりけるを誹諧にもろこし
のよしみをしりに作者に左大臣としけるにこれに准らへてよるべしも
后位に復しなさきぬほど后とうば勅令に違背するにいうしかや
又これをのぞくに貫之等の伊勢と同時のうた抄のせまえ幹などのはれ
るべきものせいてハあるべしが猶ほちかけなる詞もあれども猶ぞつる
なし又ハ或ハ業平ぬははめあひハれしく書ハ作者つきしうさ
まらざるハすら謙退ゆるハ中ねの自記なるの事ありける古今集に業平の
うた載せたる詞書のくはしきところおほくハ此ものがたりに似たるを
まに家集日記などより出たるさまもあればこのものがたりハ古今集の
編者なりしてつよくしくせるよ　又ハ万葉集の歌が採ゆきし
載せたるハ作者のくわしからずなるべし　又此物語と古今集と相違の
ありうつ彼ハ勅撰なれバ此物語なれどそのまゝにまかせて
すゆるべしは採集捨遺集これに准らふべし　又三月諸人の名

後寺たしぬもしぬるかうり女体数々多くの四十九日の行の事ありつ所
のたくひし　又さやれ物語のさびハあるつも虚実をまじへてかか
くてし五雑組にいふところのものゝ本ふしおもて文勢なるをあなるべし
このものがたりも実録なりしぬるもの多くは中ハうつ夜しつくいうべし
又土佐日記ハあらずありつ一巻なるに業平のうた物引くして三所見えて
もうあらしれぬうれどもまたらべし貫之はうさゝうもつてくあつかの人
ありうつし　又上巻に四十八段ありつ下巻に七十六段あれば合て
百二十四段し○貴ちうる右勢語臆断四巻先年抄して其稿本甚汚
穢自らわかれ侍るを春満老元字にわなかれ刊本を暇あらば抜合近日あろ
一校以没正字ス　元禄五年季秋初三契沖門釋契沖

伊勢物語童子問　写本　十三巻　荷田春満

巻首に曰童子曰伊勢物語の註解すべからずきかれども諸注の是
非なきまでにはたゝ細川玄旨の闕疑抄によるものなりし歌学者流
皆いるうもつて今闕疑抄によりて向をむかしぬるべし○此書假名に童子の

問答設けて此物語一部を注せり闕疑のところまでよくときひらけ
かつこの書ハ古註をひくことなく一の説をあげてこれを巻首
の問答ハ此物語の名及び作者の論なり古註に載る所を最初
の條に載れども一條の證とするにたらず家の名をもてあかしとし
又説をいふ作者のうへハ業平の自記 伊勢式部よりの説を妄説
とし又冷泉作者らのいふところをも採らず〇巻末ニ荷田宿祢春満荅と

伊勢物語古意　六巻　賀茂真淵

此書ハ古意といふはいにしへのよみぶりの論のこゝろのふかくたらぬ
すゑの世にハかれこれの説みだりにて論ずることによりて此書ハよつの内
いせものかたりは秋のよしやなりけるを注しも人の業平の時
代の考へしたしきにつけることろを探りくはしく明しあげたる
なり〇巻首に総論八箇條をあげたり 物語ハよくかなり いせもの
がたりかなりけれは 業平の自記なりとある 伊勢の御の書
としたり 時代のことを 此本時代の古本今本及作者の

しるし男といへる〇をしめるに野村遜志上田秋成等此序あり〇附録
にしやあしや一巻ハ秋成がしるしたりとなりこの書ハ作者をあげつ
ら秋成がやりたるまゝなり論のことをいはずして寛政五年九
月に成す

伊勢物語章甫鈔　八巻　岨山春章

此書ニ引用せる書ハ 後水尾院御講釈の聞書 九條殿下補遺公
御説 貞徳自筆聞書 玄旨闕疑抄 季吟拾穂抄 牡丹花肖聞
抄 一条禅閤愚見抄 契沖勢語臆断 等なり その外の諸抄の説
ども採りて考へ合せよくさだめたり〇巻首に滋野井公麗卿の序
序あり巻末に正五位下若狭守紀宗直跋あり 宝暦二年刻す

勢語通　写本　二巻　五井純禎

いせものがたりの書はよくかしこき君臣父子朋友等のみちを
かきしるす條を抜出し俗耳に通じやすく注釈し 二条后斎宮
等のみだりがはしき言をのぞきて余淫奔めきたるものあつ

め外篇しるしくろつけり

伊勢物語傍註　二巻　賀茂季鷹

本文はさりけは諸本の異同を加へしるしよろしからざるをば
くちよりれ侍りしはいりしつききさかへり安永五年上木す

大和物語　二巻

此物語作者のより諸説紛々なれども季吟か云はるこのものかたりの差異多
し六条家の本二条家の本とてかはりあまたあり作り清輔の説には大
和物語和歌二百七十首此内連歌二首但し本によりて異同しかとし今
世の本は定家卿の清書本にて一字もかへず書写せしといふの所し
まて作り歌ね千つく二百八十餘首ありの本乃たぐひめによりや作
者の説もいろいろなりもず作りは在原滋春業平の次男在次君と号すの所作し
たりは花山院の御作ともいふしかし中作て作り山本城りくこの
両説を兼て作りは滋春のうけたまはりおぼつかなしこのもの
がたりは在次君して甲斐の国まく身まかりてけり

のゆゑひちらしまかりひらしうめさしまは古今集にもきこし
きずそらが母にんせきそひとりりしる作りありあまたいはず
そひ作り一条摂政家の御妹良材集にはひつて花山院の御たちも
のがうしらせたまつて作りたぐ為丞きすは作りじしとせうしれ
作れく而しるれしきもそのくる作り今ひろうる文ひ作りは滋春
のきさなまつていはす古人の深かれぞひつきするは誣がしまのいせ
このがうが業平の物語の自記といいせ乃序の筆作とに二うまさ
ぶあうておりくの自記のこのましまは又いせの序乃いくるとを以
ていせこのがたりと名づけたりしや衛藤は決し作れぞ今此物納
ともきそじめ在次君の作りせしちしをきつゝんにみよのみぞしの製
作ちく其ねくはるどもなほも補ひおりしまりしやゑ作りん或人
のちきげすのうつろうといまんこうの然ぼつかなさはりけいそれ位さ
るさあまたて花山院のうせたまつてといつ乃んこうも何代りとどもろそ
うたがしくさうめせえんしや何うりがいさくこれにて旧説をまもすぞ

かゝる人ハ何事もさせる證跡ハなけれどもみな管見のかぎりにてこゝろ
ハ花山院のみかどハ冷泉第一の御子御母ハ皇太后宮懐子 藤原太政大臣伊尹女
安和元年に降誕ありて永観二年十月十日に御即位ありしをはかなく
たゞ御在位二年にて寛和二年六月廿二日におほんかざりおろさせ給ふ花山
ちかくにくれてかくれさせ給ひしかば法皇入道とも申ししが
めでたき御ちからのおよばせ給ふ亭子のみかどの御時のことをかの御心にかけ
とゞめさせ給ふにやかくし給ふとぞこの物語のよしも聞えしかど
御巻物にハ花山の御はしめにかきとめられしものあるのけしきありともあ
りて一部なりとおもはせ給へりけるにやこれも文体とこゝろの前後
御らんじてもやうやう見えさせたまはんかうしよりものなどいひて
かしこくおはしまし但信輔の説 袋草子 ニ云作者不審 但朱雀院の御時
天暦のはじめころや先帝ハ延喜の御宇なればいまだちかきころよりこ
す又ハ貞信公をし兼盛 かしこく檜垣の嫗等のことしるしたる所あれば
朱雀院の御宇のころよりも又のちにてかきつゞけたるならんかとぞ

兼盛 [カネモリ] ハ拾遺集のころ花山のみかどの御時に侍ひしかども此ものがたりにはし
るし給へる檜垣 [ヒガキ] の嫗 [オウナ] ハ天慶 [キヤウ] 四年純友 [スミトモ] がさわぎのころほひにつくしに下り川
のほとりにありしまで時代もかはらぬくらゐなれば法皇の御時にて貞信公 [セイジン] 小野宮
太政大臣實頼の御ことも今はひとつのむかしのことになりてかくいはれしかと又 [ケン] 中 にも
左府 [サフ] に任じ給ひしのちの事も見えてかくいひつたへしなるべし
うつろひゆく世のものがたりなればかく御ことにつけつゝかきそへしものもあるべく
かゝるからハ作者を法皇と定めんもかたかるべしまた信輔 [キヨスケ] のいひけるにも作者ハ不知
つらゆきの世のものがたりにて其ものにかゝれし人強 [シヰ] て可尋 [カヌ] 其作者 [ヲ] 不知 [ヲ] 旨 [キブ] をも
言葉節 [ヲノミ] をならはせたまへといへる言 [キン] 葉どものしるされたるかくいへる
らんかれしのち此説もありて後日の不足を補ひ侍るべき唯今ハ了簡 [レウケン] に
まかせてこゝにとゞめ侍り○題号ハ大和物語といへるは浦 [ジヨウ] 説ニ云 袋草
子 其名目 [モク] 和語といへる由来にて物語の中にしるしたるもやまとのことのみな
りといへども物語にあつめたるのみにてもなしとやまと物語ハ伊勢
物語にならびて古いにしへのことをしるしたるなれば○賀茂真淵か大和物語

二物語いづれも作者詳ならず人のきゝつたへし事を書つゞきてまた
しかれども又いつの世ともさだかならずみな大和物語ハいせ物語の
あとをおひてつくりしものなるべし又此源氏物語のまだなき時なれバ歌の詞
しるす○荷田春満云大和物語ハ一人の作にあらず代々の人の書そへたるなり
のちの人の書きしるしたる書なれど大和と名づけしことの心しられず○
按ずるに此物語十人種々の事ハ八雲御抄云伊勢物語大和物語源氏
ものがたり歌人のしるべとなるもの也又千五百番歌合判詞にも見えたる歌合
のことばなどの作りし人ハさだかならねども出し僉議などにも用ゐらし中にも
其余ハ源氏世継伊勢大和なども歌よみのしるべなりとぞいへり

大和物語抄　六巻　北村季吟

寛文の奥書に永享三年十月将軍御伝授延徳二年正月禁裏御本を
以て書写せしものなりといへり又或本ハ常のものゝ外なるとし
それが中におのが巻末にしるせり　承応二年五月季吟自序あり
巻尾に自跋あり

大和物語首書　五巻

作者つまびらかならず書籍目録にハ一華堂切臨とあり大抵
季吟の抄に何もかはりなし　明暦三年二月上木

落久保物語　四巻　六本

一の上二の下二の上下三四とあり作者源順といひ伝ふされど定かならず
らず○賀茂真淵の云おちくぼハ源氏物語よりも先にかきしものにて中つかさ
源氏物語よりさきにかくハ太平なる御代やすらかなるをもて此物語の詞
ざまもよろしきなり○此書の趣ハむかし中納言なる人の女あり
ともちたまふ中にひとりの姫君ありけるがわけありてうき
ちのねにおはしけるが寝殿の放出の一間なるおちくぼなる所の二間にお
るに住せたまひておちくぼの君といひてそれがありけるが
蔵人のおほきにおもひをかけたまへりけるがつひにせうとの許に
ハ貞信公の子なる実頼諸輔のもとにさるべきいひよりておはせし
よりのちくらゐ高くのぼりたまひて此北の方の事を

みしづつかさくしかすゞろぎたまへるもてつけくるしきこゝちなりしとぞ
よしは田村成の序さへあり寛政十一年上木

落久保物語頭書　四巻　加茂真淵

此書真淵講説の筆記にて信夫某なる人此書としるさし又中に
は漢字を除し誤訛をも加ふ寛政六年とあらせる千蔭の序あり

落久保物語略本　二巻

此書は万治二年に刻しゝ書籍目録に略本とみゆれど一部の
趣意すこしもたがふことなくみなもとすてゝ川あれしされど
贈答の歌一首真実と同じきものなり○此書の趣は中昔の比長
岡にさいの中納言と申人ありし比子なきを歎かけきて六角
堂の観音に祈りて姫君が生れきつよ姫君七才の時一母の
なくなられたまひぬゆしそれよりふくまれてくなりしのち一向に
父のこゝろも移りはじめて一限さけてかたまつむをさかしまはしくる
人これ落くぼの姫君と申けるが後に二位の中将の室にかおもされく

さうしをはしめとせられけるかなりとは侍るよし

源氏物語　五十四巻　紫式部

此書のなりし趣意は河海抄の説に西宮の左大臣の流され給ふ安和二年
太宰権帥に左遷せられ給ひしかは前式部おさなくよりなれたてまつ
りし事なげきしに大斎院選子内親王村上の御むすめより上東門院へ
めづらかなる草子やさふらふと申させたまひけるより
御物語をめかれけるに作り出ておまへにつかふまつるべきよし
式部に仰せられければ石山寺に通夜して此事を祈り申すに
折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心もすみわたるに物語の風情
空にうかびけるを忘れぬさきにと仏前にありける大般若の料
紙をもらひうけてまづ須磨明石の両巻をかきとゞめけり
これによりて須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおぼし出て侍る
とかやなほ罪障懺悔のために般若一部六百巻を自ら書きて奉
納しけり今もかの寺にありとぞ光源氏を左大臣にかたどれりへ

紫式部が石山にこもりて周公旦白居易がいにしへをおもひ
在納言菅丞相のためしをおもひよせけるなるべし其外次第に
書くはへて五十四帖となしてたてまつりしかば大納言行成に清書させ
させて斎院へまゐらせけるに法成寺入道関白奥書をくはへ
られけるに此物語世の常の式部が作にあらず老比丘尼が[illegible]
なりとかや誡に君父の交仁義の道好色の媒菩提の縁となりてまさ
これ儒仏の[illegible]其ことも[illegible]の寓言に因て[illegible]の
ろ伺の妖艶を[illegible]比類なし一部の中に紫の上の事をすぐれてかき
いでたるより藤式部の名をあらためて紫式部と号せらると一説
に藤式部の名[illegible]なりしを紫のゆかりより紫の字に
かへられしとも或説には一条院の御めのとの子なりしとなん[illegible]
まゐらせらるる時ゆかりあるものとおぼしめしてかく[illegible]
なずらへられしよしいへり式名[illegible]の[illegible]○[illegible]
が[illegible]には石山寺に参籠して須磨明石の両巻は八月十五夜の

月湖水にうつりて心の風情をおもひうかべて仏前にありし大
般若をこひうけてその料紙に書付けるとぞ其後に大般若
一部を書写して奉納の事今にありとぞ○此物語須磨の巻より源
氏の左遷の事を書はじめけるとぞ[illegible]
ろけ故は[illegible]寛弘[illegible]
寛弘[illegible]十[illegible]式部初[illegible]
[illegible]五十[illegible]紫式部日記は寛
弘[illegible]五十五年[illegible]其は宣孝に嫁して
大貳[illegible]相違如何○[illegible]定家[illegible]
[illegible]其外は何の[illegible]十余[illegible]
これ[illegible]
大意[illegible]部[illegible]
[illegible]其身[illegible]一部[illegible]
常に[illegible]聖主[illegible]

ゐまだ叶ハずとて罪ゆるされずしてや地獄にハ入りけん源氏の為にこれ
ゆゑあてしハ又いかにしてぞ何の為る君臣いかにいへども何の為ぞ
匂兵部卿の作者をそしりもちたりて朋友いかにく何の為ぞ夕霧薫の
さりハもろまあへに似かれど夕霧が為に恋のまなをこしらへ給ひ柏木
の君を信仰くんの宇治の中君の白きは又はつらもてのはたび
くだなそれも罪すれりず春秋の褒貶ハ善人の君ひ悪人の
悪きを面にあらはしてくれりし彼ハ仮にしるしぬれをべし勧
善懲悪あるよしかれ此ものがたりハ人のさまに善悪ありをしりめる
ゆゑあらり何ぞ此春秋等にひとしからん○此物語ハ作りて時代の
すり又ハ一条にあり醍醐朱雀村上の代に准ずとしられど相壷の
とびゆく延喜朱雀ハ天暦にしたがひ又天暦にほかしなり又源氏
の君ハ延喜の御子に当るべたかを何とぞにすべし周公旦東征為
丞相も須磨の在し以て見る君主ハ女御寄通の事ハ高倉の
明年二条后の寄通の儀相似てるに准ずとし○賀茂お関ハス源氏ハ

朱雀院冷泉院などそのまゝかりく宇多天皇より始まりいつの代をぞ
やりみましまあへ説ハたゞ一条院御時のみに作りしもりひがしいひのの
よぶり○此物語作者の事宇治大納言物語にいふ今の世のし紫式部
が作りくさりて行ぬ世よやさしうけるんハ紫式部が親しきみ所か源氏
ハ作りてましてもあらりが後も出けるんを世にいれにていふ○藤原
兼冬公の世俗問答の説にいはく班馬が史記班固がかきまさに紫式部
が源氏物語によく大弐三位が宇治十帖がつゞりしてのちなくくそく
○源義韓引おもうに光院所説ある宇治十帖も大弐三位の作にてきく
説これ然ならず文章おなじ所なり八紫式部もまで御所河のごとく
書てらし其故ハ常八四代目の八五十五年のほかなれども人の個つらひ
もおりずらくらもてゆくる世その大しひなり後そしるもりく
心あしくと筆代あるまいにいきなり後次にまにいしたせりとくく○要吐
え此物作発起の説くあるまなり紫式部が作るれとふ心あれ
されど皆一定しく信ずがうし○此物語澄など一やかりしさる河海

お孟律お等まで行成の自筆なりとも悉く今世に伝はりけり源光行ハ八本を以て校合取捨して家本とせりといふ二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河左大臣俊房本 子あり青表紙左大臣筆妹 従一位麗子本 土御門右大臣中宮大夫 法成寺関白本 唐紙小双子号尚侍 後京極 五条三位俊成本京極中納言定家本 巳上青表紙と等なりといへり 徴なしといへども皆其因なり于古本なれば勘へ合せて見ゆべからず 今世の注ことのみ定まれるなり古今の証言なり 黄表紙後成 青表紙定家 三条家これ所用也奥入など云ふものありて己達の所為なりとて為捕母阿仏尼氏後母と奥入を切て除しといふ或説奥入ハ伊行なりとも云へり定家ののちにかへされしなり 河内本ハ河内守大監物源光行ハ右の八本を以て校合取捨しける家の本とせしなり〇紹巴抄に云此河内本よりの差は大方の定本にて皆首並なる表紙也は断絶のよしあり此河内本と光行源氏物語の注本にまとめてありけれ共河内本よりかへりて世にひろまり耕やかに河内本を信じて後に伝へて用ひけるとなり

さて宗祇定家の本なれバかしこく志ざし良基もおもひしとのひしく逢ひける青表紙伝授しく宗祇より肖柏三条西家は一条禅閤の注ふべきをめぐりて三条西家内府実隆より講釈せられしと禁中乃みかどのおん遊覧にも供へ侍りし事のありける〇雑引抄に云京極中納言定家の青表紙と号す宗祇用ひて今も流布す一条禅閤の青表紙は周防の国のちの後までの事なり紙の傍中にかへしさし外題も青表紙よ定家のお付書し百四代後土御門院宸筆うく式の外題とかせんゆるされしなり源氏の外題と今世とこに中よりとすハこれを例とせり定家の自筆ハ相当花宴橋姫の三帖し餘ハ後成の女かきのるよし小倉にて此巻とやしは道達の書たしこまりて〇本居宣長翁の要領に河内本なる表紙にて此物語二本よりまれるよし近代の注釈これ青表紙とすひらへしとらくこれは考ふるに今ハ二本の差別なし大かた今世に伝はるハ青表紙のしくなるにて此のるべきこの分くべくこのほどの

さいりはよう多く撰考へ家々に秘蔵せしかバそもうれこれへくうしう
どもられバ河内本これバ青表紙と全篇られたるハえずろかしうち
小さい此青表紙ハあまでもなげ大抵定家の青表紙といつかしろ此中る
まゝ河内本といつるつまりたるところの作なもあまでも全篇ハ志
うしずされど河内本ハ今ハ大かた流布せずなんずうはのおくつうの
なりすべくられどなくつきてるの名○しかどもれしうは河内本なんてくえ
し近き世の私おもよきけくいつるハちおつあつ取りていかでし今見えは
ずところ多本はさらにいひ河内本もあれ青表紙もあれよき證本
ひはしきう私の書てこそつつるしすぐくうあ家のがつう今此世の流
ふくしところいつまで伝写の誤られつらひみちびひ脱落誤謬等多のりして
さくしがたき本多き事をこのがうハ京極黄門ちもじあせらるれ定家
ん取つをし深くもてあうずなく賞翫他書よりもあり、よ諸
なしもよあやまりすくなく善本多くし幸に我が自撰おもしして其
本取りしかるもさるより作べくしよろしかりし○此物語古今稀なる

乃ず更級記にハ○その此かしこやおみくのみれあけみくのぐう
光源氏のはかなしごとのかぎりつゆさまかなれど横笛ちよ
まちもしみつぞろ若けきなりん言く又光源氏ぞうおん人は此
世うおりしりやハお月見もあのもうすけしすゑたすらべさかむさ世
なりきくみえいつじくやんごとなくうちはつさやお作よ河を見
源氏がらのやまあおきさん人おかしのまひびてもかしにてなう
さしくうくての女君のやまうつれかくしいてうつしおて花の宴青
あう秋などめくいつし人はなげすしめすううんはすしかど秋のゆし
やんてろせあしたぞうおりひつけあ、やしごしも我ぞしうう
えし又云此源氏の物のがたり一の巻よりしてしれと世しまへてこう
みおちうし行うき みえもつきみのもうみ字治の又此むすめども
のせは秋つれしとろかれぞうこしもすなやつるなうりんと思し
くつひしところうしげなれりしさかなしとてひつからしじてるさ
うて后の位らしもの字治の女君なかつくろうさ浮舟の女君のうう

ふりやみたりんれどもおもひ出られて 寛仁四年以上ちかきものゝ此
ものがたり猶はじめて八此更科記にしるしたるに 又其の御作ともいはれ
こまかにけるかり 狹衣といふ 何ありかたしとひつかりもそれたなりしたるくれ
やむかしよりはつねりんれどもかくしてや光源氏の此ふ人ひりあまの
ををハのふかんすれども何らんずなるにかしこきほつめたりともありもなし
まかりとなく 寛仁四年右狹衣ハ源氏をまねびけるハおの作也としてひけるを
母の作れるものゝかれども狹衣とのもつくりもののがたりかれぞいひつけるを
しるく川角ゆるよし傑素おもふ狹衣の作者大貮のみ位といふしずと
○按ずるに此ものゝ稱名のつゞ頃から源氏狹衣もて餘情をいひ出たり
又中古内府の見護といふ紫式部が源氏物語作者とありしく作るハさ
凡夫の不作し八背して日本紀抄をもがめしく諸家の日記よりつくれぞ
いさゝかえらうしてかの人日本紀の局とあるかりとおもふ 又
野長明がそをおもふとも此物語作者そらにもあらそれで此世に
つなしがめでいるを背ずゆれまうさふるさにしるし

その背ぜゆれるまゝかれは此そのかたりハ一書もつでいりしやまとのふつでまのし
これ細才覚ありくりん人源氏よまうたんかにかはく〳〵て書す
人はりんやよりほりかりて行ずかゞ源氏物語にそてあるにこゝちいふ八
されども作らるそでりん凡夫のまるかしといふ背ずりあげるりいふ 又東
鑑四十二云建長六年十二月十八日丙戌於御所光源氏物語事有御
談儀河内守親行讀之云々 又鳥丸光雄の説に源氏一部の詞を
しれうまもし毎句きよかしめハかし されど中院の源氏講釈の
時鳥丸公の作せられし源氏ハまづくそ此作しし何とかあきていふ
もさおりしのさなりけりしといふ 又一校新安間云源氏ハ和国の
奇筆也 紫式部の官は下の處に見えて孝庸をすりし人國物の妝とあらへ
ら此人の作りたる孝庸をさ帝に世教の便となる書ハ何物ら
才下侍るべきと云 ○さ世りかども源氏とのがたくとこゝにつれなりし 又
歌学の博学よ才のもの行向がも同じく源氏にこそゝまあれ
なし何にもま源氏をゝくすめるとし ○ゆめ源氏箱百遍つぐそよ

入ことものハ教学の成就しけるのちにかへし孝謙の御ことく〇勅撰
集の中にはむすびおさめたる八千載集　新勅撰集　続古今集
続拾遺集　新続古今集也
一巻　桐壺 一名壺前栽ともいふ　二巻　帚木　ならびにあらず
並一　空蝉　縦(タテ)のならびにしてならびなり〇巻のならびのもの
いはゆる竪並のかくしび春日祭　又才五以上の巻の並をの枝
菊の宴なとは後れのものぞおほきも並一は同じことあるの例(タメシ)の
凡かくしのやう一編よ同時(ドウジ)のことにあらず横縦(ヨコタテ)ならびにつぎ
とふらうけるそれ竪のかへしびしりよ字様のさまとして見
後れハ横し末摘花ハ縦横(タテヨコ)ならびなりし
並二　夕顔　縦のならびにして同じならびなり
三巻　若紫　ならびにあらず　並　末摘花　横縦のならびにて
四巻　紅葉賀　ともいふなり
五巻　花宴　ならびにあらず　六巻　葵　ならびにあらず

七巻　榊　さかきともかく　八巻　花散里　ならびにあらず
九巻　須磨　ならびにあらず　十巻　明石　同上
十一巻　澪標(ミヲツクシ)　ならびにあらず　並一　蓬生　縦のならびにして同じならびなり
並二　関屋　縦のならびにして同じならびなり
十二巻　絵合　同ならびなり　十三巻　松風　ならびにあらず
十四巻　薄雲　ならびにあらず　十五巻　槿　ならびにあらず
十六巻　乙女　同上　十七巻　玉鬘　ならびにあらず
並一　初音　縦のならびにしてまた同ならびなり
並二　胡蝶　同上　並三　螢　同上
並四　常夏　同上　並五　篝火　同上
並六　野分　縦のならびにして同ならびなり
並七　御幸　縦のならびにしてまたならびなり
並八　蘭(フヂバカマ)　縦のならびにしてまたならびなり
並九　槙柱　縦のならびにしてならびにあらず　或ハ槙柱とも云

十八巻　梅枝　同じく名とす　　十九巻　藤裏葉　同じく名とす
二十巻　若菜上下　上より下巻になれり或は下巻をもろかづらといふ
廿一巻　柏木　ことばを名とす　　廿二巻　横笛　うたを名とす
并一　鈴虫　詞のならびにうたより名とせり
廿三巻　夕霧　うたを名とせり　　廿四巻　御法　うたを名とせり
廿五巻　幻　同上　　廿六巻　雲隠
此巻は名のみありてことばなし白氏文集に巻のうちにいふかな返九ゝりしね
ことばなくもてなさずしてかくれたる事を避去(ヘイキヨ)といひてこゝし万葉神亀五年左大
臣長屋王賜死(シシ)時の作歌
くもがくれ又ひとまはかはりぬ　しかはあれども此ゆくほどの事をよく見すぐしつる
此外不可説(フカセツ)竹河ノ本事の巻ニ六条の院世の中をのがれ給ひしつかへ二条の院に
うつりて此はしゞ給ひしよ程へて後かくれ給ふにや此巻の中にて二年隠
れしことなど見えつれば崩御(ホウギヨ)してのちにこの巻いのりとなし候へば
もし巻の名ぞ見えて同じくなしとせぬ此巻は四教の法文(ホウモン)に例(イ)よ

りゐをかなしきものがたりとして作り花(クワテウ)をなぞらへたり又ばし
なにもし此巻に八九年のものがたり
廿七巻　匂宮　詞を名とす或は匂兵部卿ともいふ　一名薫中将ともいふ
并一　紅梅　詞のならびにうた　并二　竹川　詞のならびにうたより出
同じうた也名とす　廿八巻　橋姫　宇治十帖　うたを名とす
廿九巻　椎本　うたを名とす　　二十巻　総角(アゲマキ)　うたを名とす
卅一巻　早蕨　同上　　卅二巻　寄生(ヤドリギ)　うたを名とす
或は一名白鳥(しらとり)　　卅三巻　東屋　同上
卅四巻　浮舟　同上　　卅五巻　蜻蛉(カゲロウ)　うたを名とす
卅六巻　手習　うたを名とす　　卅七巻　夢浮橋　ことばを名とすの此巻
の名はことばもうたも見えずこゝろうへし八十余の事よ世中には名の
ありてそのしらぬ所あり見つけて此の浮橋につけたるのなる
詞海にまつはる此の巻の詞のしるべをもとめて見れば此処(シヤイ)も
あまりとも見えしかども此のゝ物ありけるもの

たゞつゞしれゝとゞめてよく
○拾芥抄に源氏物語目録部立(ブダテ)あり明石の次に浦伝ひ東屋の次に
狭筵(サムシロ)の巻ありて今此ふたつハ両巻ともなし○五十四帖のほか桜人の巻よ
巣守の後は桜の巻よりすまてお宇治十帖ありけれハ光源氏の末つかれ
たかひはいつはり作者の筆たへ宇治の八の宮の姫君よりひたすらけり
をかけて○業平にて更科(サラシナ)日記にも源氏ハ五十餘帖といへりし六十
帖といふへし今流布(ルフ)するハ雲隠 浦伝 狭席 等二三帖もありしにや
さて大数(スウ)に挙(アゲ)て六十帖ともいふハ天台の六十巻に準(ナズ)らへてある
よし此ハ物語の中に天台教つくりけりとかくらけむ台宗(タイシウ)に
ゆかりあるの事しくいへるなり

源氏物語嵯峨本 五十四巻

角蔵氏蔵板にしるしたり源光悦のすきし料紙(レウシ)ハ雲母(キラ)摺にて表紙に
いろ〳〵の絵模様(エヤウ)あり〳〵ても母おりく〳〵にありし光悦のあとなし
此板ハ僅紙の角蔵に在りし保版を作りしハ角蔵なりと称す今

ありしこえなとしておこ○源語秘訣ハ此書に現世(ゲンゼ)流の謹なり伊勢物語抄
に前聞(ゼンモン)抄古今集つゐてあり又古今物語秘訣方丈記抄を言はなけれ
納言二十四巻乱世徒然草作者の文をも渉猟(セウレフ)する諸本なり

源氏物語繪入 六十巻

慶安の比山本二郎兵衛春正此物語を絵にえかきて句読をしるし
てかなつけ旁注(ボウチウ)をおほく加へたり頗(スコブ)るひとしてせしいうめし
此春正ハ長嘯のつたへしく見えたりけふて蒔絵(マキヱ)の名手也挙白(キヨハク)心評
うちに上梓して此本ハ宇治十帖の末に源氏の系図一巻を附し外に系図
一巻目安一名紙下(?)二巻引歌一巻抄あり若菜の巻を上下にわかち
て全部六十巻とせり○此本の外に半切本小本等ありその系
図瓜下引歌なく〳〵よ

紫明抄 写本 十二巻 素寂(ソジヤク)法師

序にいはくやこのまれる人あはれの月をにつく世すてたる人
かえに光源氏物語をもてあそぶくせつけさまつふろかれのもし

へるゝびしくなりしがゆゑに和漢の才学ありしとうんじすちくさしつさ
さのらさ為にまじりしれやしかるとしけんざあるとれ給ひえら中秋づけ
て紫明抄といふもうちの心しるしの奥書にて、中すりのあふのひうう
物しうさいりせりしと志うおり○源氏大閣なとし正徹元年に一部可ば
つく明親王が関東へくだり下りてお軍に相つどめて関東の六師より
天下なれそうらせし彼親王より河内守親行および八条家代りのよし此うろくへ
源氏の注釈うちくみかし作ち下さし〳〵紫明抄をえらし〳〵ためなり
てまいりせらる

ひうり君か作やろうりしりあん入江かりひうるのしは
別ろめぐりきおりうそうもしておきろうあしみえ〳〵なりの作よ
廿二首ハ光源氏と紫のうへまかぎ〳〵つくしり見えろうがなりよ
いへとえろうせつまさひうりへ四代あひめうるのしは
うちすへそんなりめぬひしきうのるかほりしるすゑくるの私

河海抄 写本 二十巻 四辻善成公

此物語一部の注し自序ある光源氏物語ハ寛弘のころあるかち出来
乃末よひろまりよけりうせしけりてありしよりしくやしけりなうこし
かれうれ世よ中納言定家八巻ろう雑記なけうらく奥入としたつけ大
監物光行家ろれは侍れなりしく水抄しみせうるあろ行の御法
ずなへ侍院坊よおりしまし時同じ左右よれてかりうめく御法
のうちまけをはうらせしれね碁硯御住れうじめの梨壺の説は
よあけでく万葉集なとしとうしめ例ぬかりされりし和歌名のめく人
ねさうざめく五十四帖が注釈せしく哉るうよ先が忠守が九七
の流の底のらが他めく九ろう○の採りぬしけは志きうよ顧問よ
あつりきく志うし秘说が奏しきこうよ给やすのよろうんどとうの
ま物けくるよ惟之良清が風ぬくらよいやしきく為ほうりう
とやうた物ナ成りし昔より格うりしのやうが為めて今うりのおで
みどりれ神のちのりしぬかけさなうとれてくりしさるあ為の作よ
うらうらうさしはりうしせさんしすけぬつよ中華の解よ注りめて

かなしびあはれもわが別離(ベツジュ)の海ふかくかきくれ感きはまりぬるとの
づくりをみみへしれぬよしのをかしひろかくとめずおもむきの意ほ
ぬすてさるぐしやうあつめくるを色とするもつけく河海おとしよ
く○此書每巻の大意(タイイ)をあげ正五位上物語博士(ハカセ)源惟良撰しまうさ
るよしこれハ善成公の仮名(ケミヤウ)にしく惟光良清二人の名かしら合され
ならし此二人ハ源氏君のむつましくめしつかはれたるものなりくし
巻第一　料簡(レウケン)　此巻にハ物語の起りの事　時代の事　其原氏物作
号(カウ)すつる事　式部の伝　物語おもしろくなりたるものなとをのせくはしく
桐壺の巻よりはじまりてあり
巻第二十五　奥云　四辻左大臣言中書(シシ)中書師等に永和元年より十三ヶ年
此今ハ永和四年五至季(テキ)春四日二書写一筆訖　永和五年三月十四日　於伝
基奉右判
おなじくて名残をへていふすなはちもかはれてそのへ物語の作
読書(トクショ)雖迷(ヒ)譯(スイ)器二依(テ)志二切(ヒ)自基重家此一本取令二相伝也　退不有拾

六(ノ)自仲春頃今至孟(マウ)冬ノ頃二自(ミツカラ)書写(シ)一筆二訖ヌ不(ル)可(カラ)出二私(ノ)箱(ヲ)者也　師阿
すべてもろもろのひとつにもわかちうるハ世にもはやむるものにしかみ
此一句耶(ヤ)にて文正元年　文明十三年に書写の奥書あり
○契沖云此あはれ抄(シャウ)物の大部なるハ河海にの始(ハジメ)にあるる暗記(アンキ)のれい
へる草案(サウアン)を伝写(テンシャ)のうちやうら日本紀万葉などを引き(トウ)ひかれて
のち書にてならす本(ホン)のたれのいずれもあまたくおの引きれくはなはだ
おほくもこれをおきまく信(シン)ずべきものにもあらずかもいかにもこ
へし根源(コンゲン)を考(カンガ)へずひろくなしたるにより此一書のしかのすかれどの
いふもいでき、いでてのおともあやまりあしけずなりけりしましく
かしまならしなりものめれど本(モト)あれさまずにいでしうけてよろこびわ
らうくつしむべきなし○本居宣長云河海抄註釈(チウシャク)ハ河海おさ第一の
このかたりもまりにもこれあれあら注(ジュ)あつてもひろくさがくし
しかさうおのおハやすくもろうし儒佛(ジュブツ)のもろこれ此古言をもとひろ
く考(カンガ)へ出(イダ)しく伝もとをくしのそれくるめしくことひさしめ

らけれるとそ

源氏論義　一巻　二本

伏見院東宮にて御時弘安三年十月四日の夜源氏物語の中の難義を
二十ヶ条えらびて問者をさだめ六日の日論義すべきよしおほせありけり

右方　康能朝臣　兼行朝臣　定成　為方

左方　侍従三位雅有　範藤朝臣　長頼朝臣　具顕　左右八人

問題二箇條をならしめて勝負を決す　まづ論義十六番し　判者を

源具顕　序跋をも同人に　此跋ハ文體を古今集の序になずらひてかけるを

二首をも又扶桑拾葉集にのせたり　○此書奥書に推世子のなかに以て

書写すとしるせり　寛文元年上木す

仙

源抄　写本　一巻　藤原長親

此書ハ源氏の中のことばを釈する事詞にまかせいろはにわけて注せり

○長親ハ南朝の明魏のことし又耕雲と号す此書の跋によれハ

ひのもとのあるかきりにや諸書に明魏のものかたりひの論を

今もみなまたちはなきものなり　○又和字大概抄の序にいへる

定家卿長きよのつまでもかなづかひの事をさだめたまふ光源氏物語の

ころにあたりてはつかしきことをもしるしたり　はかなき事も釈して

ていはるゝいはひも簡要ハすくなし　註釈ハ多かりし又同釈をもあつめて

ゐつそひしところも見えしを　ひろくこれをよりて水源抄五十餘巻此

抄十二巻源中最秘抄二巻の中古人の解釈よりも引のこす所おほし

奉行ものこりでおほし　一ぶんもあらしもなく残さずして定家の自筆の此本

比校して　捐遺のこしかきつる同じ事を作し掲たいろはの次第

にあつめつゝ　わかち五十餘帖ながらこれを一帖にし　中の文字のつゞきを

ありめぐりたがへられたるをあらためて　もとより文字の仮名のこれ

語抄といふなるへきてはこゝろのつきざる所をつのりて　作るゝ中

此定家のさためたることはりのゝ家に説の相違もありてしるしけり　申

ひろくかなはらす漢字ハ四声をわかちて同じ文字も音をきく

ぐひくんかなはまぜて字細にしるす和字ハ文字一つのかはりに文字あれ

まりくんかなづかひをさだめしにおなじかなにてかよふありあるひハ引の
しるし梵字の音を用ひたりゆへハ去声上声又ハ去声入声ならハ短ハ熟入声にてハ空
声にて作ハ伊平声なし　或ハ訓梵音を假用ひたりてハ止もあし江ハ江にえハ丹也
みれたるひろいなかりてず万葉に似たるをいろハにすなハいろは四十七
字のうち同音なるハいをとゑえおなどの類はひとへにわかちてえを
とよむハ詞の字の訓にあるまじきつけ文字なきにしいろはをとつゝにお
むかしまで当時ならばむれる字ハ去声なりし二定家がれみちにてこと
下概に山の打たるけりまけし去声に誰にゆ声を定めたる事ひとつ
今くいつは去声にハ平声上声に外すしなれひみはひみだは
りさおきのえ非なるかしけるしれ去声なれ此りしも此りし
よりの此りハなしあれ此りんとハ去声はのハ上声にハれねしみな
字も去声なりつるにかえてえるかしけるすでにいづれのみな字
も平上去入をあらそふてしれしてかみのみ字みな概あをせ
よむに詠しかみをかみ経し又一字をそハは本音では紙破しきの

かしずし同じく同字をよむに上下にひかれてよみかはれり　天竺悉
曇の法は連声といふ事ある又内典の経文をよむにも声明の音便によ
るにて声切なりけるによれるのなれどかくし神代
りにまでよめるか文字ハ去声なる一字によりても序破急といふ
ハ破の字平声なれ破切にて破をかくなれば切ハ去声なりとさ
だひはれぬ去声和字に文字ほどひの〇くにてあさ
に切定家なきたるのも諸の音を尾の音おかしにあてたる
音につまりしてはすつき上声いりみのにめしにて四
声になをせず又一字に去声かけ並てん其文字の訓によりかしてし
ひたし音をもいはずも多なあるにばいつもの篇をうつくしさこ
めとる他ばつるにしるにかにもけるにこのつけをいうてもひつらよ
いずへひこつるにもれ信ぜば音義よりかしこつしてさまりて
けり一帖にハ文字は法ひ概さとやすうりハ先達のあるおば
似たりとい上にも音に通ぜんものハをのづからこの人概をそけく

さかりなり
山のはにちかきかたにありけりなかきあかてうらかのかくすきことはさかりけり
○年山打聞ニ云 右大将長親ハ法名明魏耕雲と号す 実ハ河
内守のいはく 此つくりハ南朝の人にて右大臣大納言を経て又累代の人なり
故此物のなの系に明魏はかりとて鈔ともなりきハしてるかしよし又此
書の奥書にハ仮源翁語を道春法印の野槌に明魏ハ花かれにたいなの
れちうやかく自由に書つるやうなのをかつまし 延徳の比のことなりし
牛代のりのものとれりつ今仮源翁の語を悉くうつまに長親の説
ハ誤れることあり 林氏ハ明魏の説何とて八ならぬそも必定の
語のくはしまかりしくめ迹にあるをときあかしおれまくうることゆ

源氏小鑑 二巻 同上

巻首に物語発起あり 准拠のあり 巻ありなかなる物語もし つきに上
達部あよ人の人々又 春宮かた 女内侍のもに 女房 更衣等也 名目の作
りあけたり 以下ハ一部の大意をしるしてしたるなり○此書ハ公方

源氏物語系図 一巻

勝定院殿義持公へ耕雲老人進呈せられし記なり
此書ハ一部の中にあるところの人々の系図也 奥に系図にのらさる人々一百二十
余人を別にしるして名ある人ならぬ人を出せり 附録に巻々の古き
外題くなし 源氏君薫大将等の年齢もしす 其次に清少納言作加巻の
名 桜人 巣守 八橋 さくしく 花見 嵯峨野の上下
古物語名 伊勢 竹取 こまのは 狭衣 正三位 隠蓑
岩屋 おちくほ 住吉 浜松 こやのへ 清松ふみ かのかたおちくほ
伊よ上 唐守 藐姑射 大和 在原滋春作或花山院製作云
其次に源氏物語の目あり○奥書に云 此一冊依桂蔵主所望二
以家本加書写者也 天文十九年六月日 桃花末兵判 ○此刊本ハ湖月
抄頭書等に附す

源氏物語系図 写本 一巻

系図のうへなるしく刊本のするの附録なり○逍遥院実隆公の

跋にいふ 光源氏物語系図よりはじめの所は此代にいできし詠人のなるべし
しかるを其ほど下異文字多くうしなく是非をたゞさずしてかくはじめて展
轉書写のあやまりも多く此比はこのすぢにもつはらにする人もなし三四箇處の
ぞはたゞひとあひうつし五十餘帖のうちをえらびて煩乱と
なりたりけり御伺誌ぞうつる紫氏族をしるかんずるは見ぐるし
ところなかりし一巻にはなして一人ゝゝたるものにやとて此長享二年八月
青陽仲二月まされ此かもしそうつりぬ○又永正四年五月十二日作者不知の
跋あり此系図ハ三条殿内大臣実隆の新作にて作り出此の物語よりうつ
おすゝめしが此田に宗祇法師又為中納言基綱のつかはされしに
よしひあつて此人ゞものある一巻に作らるゝ○按ずるに此系図ハ
より伝へられし実隆公の刪略したまふもし此公の造意ならざる人なんと
江田世恭が所蔵頓阿法師の真蹟の系図一巻に余が親しく見て知し

源氏物語表白　一巻　安居法印聖覚

紫式部が為に伴すなはち此の作しく人々まつりぼより巻々の
ことにしまで巻々の名ども入て作りて此文の結尾の詞にいふ南無西方
極楽弥陀善逝ねがはくは狂言綺語の誤をやはらげて紫式
部が六趣苦患をすくひたまへ南無当来導師弥勒慈尊かならず
転法輪の縁としてこれらをもてはうぢん人を安養浄刹にむかへ給
まつれと○案ずるに平判官康頼入道法名性照が作宝物集にも
四々妄語戒を説くをかへして紫式部が虚言をもつて源氏物語を
つくりし罪によりて地獄におちて苦患しのびがたきゆゑに江へ源
氏物語を破りすてゝ一日経をかきてとぶらふべしと人の夢に見えたりとい
ひしそも歌よみどもあつまりて一日経をかきて供養しけるとぞ見えたりとおま
えんことのはのつみのがれさせ家にも此集かゝれたりさるゆゑにくみある
人がおほくなりはべりしかど弥勒捨集釈教にも紫式部があ
とて結縁経供養しけり侍りける薬草喩品をよみ侍るとて捨

大納言宗家

法の雨にわれもやぬれんむつましき若むらさきの草のゆかりに

堕獄(ダゴク)の説(セツ)ありて世に源氏物語をもてあそぶ人は功徳(クドク)をなすべしとて

けるにや一篇の表白ありし時つくりたるにや○雅嘉按ずるに宝物集

にいへる紫式部堕獄して苦患(クゲン)をうけし人の夢にみえけるよし

其沖いまだおもふに此説は老つらねしにやこれ此説の作者(サク)に及びたれば信実(シンジツ)ぞ

ものの今物語にもいへる人の夢にみえたる事は神のおしへのやうにいへるにつけ

るはあやしき作(イ)人のいひし事○これは紫式部アヤマリて源氏のよみたく

むかしより人のいふは世にあるさるゆゑに地獄に落て苦をうくるといひて

ぶし源氏のむかしの名を具してなにかあらず作りつゝ此書でよ

く人をまよはせし吾(ワガ)心に思ふことをいひはてぬべきひとりよなりやよ

もつていひし所○なりよ

桐壺のまきにもいはんやもうはかなきをあかしつゝ○けてもあれん

ともいへり○此表白も湖月抄に附刻(フコク)せり

源氏物語千鳥抄 写本 二巻

跋にいはく昔四辻の儀同三司(ギドウサンシ)光源氏のあやしき講談(コウダン)の席にはしめりし至徳

三年の秋より嘉慶(カケイ)二年の冬に至(イタ)るまで五十四帖の秘義(ヒギ)を述(ノベ)させ給ふ

ひとよ相承(サウジヤウ)の末葉(バツザ)につらなりて一日も座をはなれたてまつらざりしかば

よみおぼえしに聞えしことども○をかきつけ侍る双紙(サウシ)二帖にこそ

づけ侍りし千鳥と名づくるは三十二○年の後にかたはらの九十の老人の昔のことどもをかき

べきよし今これは返作(サクワン)の閣(カク)の席下(セキカ)にまうでて世をへてもかはらず○

覆庵(フイン)のうき身(カウゴン)に悪(アク)ひをなしえし老の忘れ世をへて立もなしも侍る千

その後はなしおほえしゆゑ人のものすがたはのこりなくおぼえ侍るにこそや千時

応永廿六年己亥季春下澣(カカン)かきしるし　侍中兼載(ケンサイ)付授之称号也且備(ジユンビ)く

刻誂おもむき白地(アカラサマ)に令(シ)書写(カキウツサ)しむ　素下叟(ソウカソウ)

花鳥餘情 写本 二十巻 一條兼良公

河海抄のたがひあやまりをさしてかきとゞめ給へるものにてさながら考へては

へられたることどもあやまりしをなほしたるなり○明星抄

にも河海抄廿巻四辻善成公作 順徳院第三世の孫也 小系のまきに

みかひとりし其上を故に来歴(ライレキ)は勘(カンガ)へてあらはれ述らるゝことおほし

河内方に遣さし 水原ハ源光行なし 花鳥餘情ハ成恩寺兼良公の作にあ
の説抄にて義理を演説す これも青表紙にハ相違の事あるよし
されども表紙ハ只奥入一抄の首紙手訳あるのしるしあれども河海花鳥の
両抄なくしんばいづれの本にかよるべきやなりしも至宝のお
なり○此抄自序に、とく神御の至宝ハ源氏物語にるとてるハ於けるー
これよりくせにみりてあらびこの抄りく花鳥の情ならいさし
家ゝの注釈まちゝくなりしく雪蛍の功をつむもの也ども折中のむ
河海抄ハいにしへ今の抄考つく源氏を説とをまきてもの也○
まふしく指南の人抄ならりきるハ是ぞ其の海に千尋ぞしくあ
とおもはれる奥義として円の枝にまでふかく、ぜひあり兎毛あて
残玉る抄ひろひあやまれる抄るをもりハ先達のしをさまうむかぶれむ
ほせのむしもいかんがもてそれんやつかは君眼於みてつくろ於て舌
このつく花鳥餘情もそれもりあり○巻首よ作意の論よと
巻末ニ文明四年除月上澣桃花老士七十一歳しるとし桃花老士ハ

兼良公の別号にして応仁乱の時南都にくだり著はされしものなり

花鳥餘情異本 写本 二十巻 同上

明星抄ハ花鳥餘情両抄を一ツに続撰せり一部の大
法よし、たゞ両抄相違の事をしるす

源氏物語年立 二巻 同上

巻首に源氏物語諸巻年立をしるし源氏君誕生の年より巻く
すべての人の系図附条目をも立たくらべ見るにやすし
上巻 桐壺巻より 真木柱巻にいたる 源氏二十八歳
下巻 梅枝巻より 廿九歳 幻巻 源氏五十二歳 薫五歳までこれよ
り以下薫の年立にして 竹河橋姫巻 廿歳 宿木巻にいたる
○此書ハ諸抄年暦の相違あるを正せり 八季子のうの不審をいたし ○奥書ニ云源
氏物語年立一冊者故禅定閣下所製作也件正本応仁大乱於桃坊
文庫為白浪奪取畢 又爰経十年不慮感得之云々 永正七載秋夏
中吉 前博陸叟 右ハ成恩寺殿御息一条殿冬良公也 ○一本奥書云 右

年十五者愚身四代曩祖後成恩寺禅閤之述作也云々　桃花蘂葉　生年十五
歳ありし○此書も此書湖月抄等に附刻す

源氏和秘抄　写本　一巻　同上
物語の中に一ふしある詞どものむねとさるべき所々のかぎり注せしめられたり
宝徳元年相国禅閤の假名の跋有り○奥書云右一帖者前関白相国
一条殿為初心者所制作也

源語秘訣　写本　一巻　同上
此書ハ源氏物語の大事十五箇條をあげてこれを注せり其條々ハ
桐壺巻　源氏元服有ことのよし　夕顔巻　揚名のすけのよし
同巻　侍童に擲瓢するよし　花宴巻　公羽も得ぐく鶴をめでつるよし
葵巻　大ねうの服身のよし　同巻　ねのこもちひのよし
同巻　さうしやうや帝の一のよし　榊巻　ものゝつくろひのよし
明石巻　まくらこゝろのよし　薄雲巻　うす衣ねなすとりひろうよし
乙女巻　としのひうたのよし　玉鬘巻　えらるのくずつかいてのよし
初音巻　高巾子のよし　胡蝶巻　ひきうちひのよし
藤裏葉巻　浅ひうちぞう月のよし
此うち三箇条ハ大事ハ揚名の介ねのことわりかはりのとかうらに

不審抄出　写本　一巻　宗祇法師
河海花鳥両抄の外に不審のところどころを一條禅閤へうかゞひ○そのうへ
問答のさし

帚木別註　写本　一巻　同上
そうぶの巻ハ雨夜品定のことをくはしく一部のうちに解しやすからぬ處
かれぞ別に注せしめられしとかや宗祇の作なりといふ奥書あり
又一名雨夜談抄といふ　七巻十二冊　牡丹花肖柏

弄花抄　写本
河海抄花鳥餘情等の説の中より抄出して別に考へ書つけたるもの
なり○此書ハ逍遥院実隆公より牡丹花老人の聞書しく巻首に
先源氏年次　延生桐壺巻より五十二葉幻の巻までしるし薫十四歳

白らの付色より桐壺の巻まで　此うち白らの巻以下混乱次第しがたき
おほかた別されば候すべき　此外に業ひ無術に係氏のもの説の一言を
補ひけれ入るも　それぞれの書き誤を引ふ　作者　時代　號　准拠
古来称号おほひ代々あり　○奥書にいはく文明十八仲夏初九入眼畢
又云同九年二月重加是正了云々　又云肖柏真筆あり　初めに十四日長享
二年春中八於種玉庵主宗祇令受之　一巻として文明十九宗祇作に不審
不審問記は成ある候聞書や肖柏ノ写本一冊とい文明十二庚子季春
肖柏以御本講聞条々以被自筆被注自分勘義合点等やと　永正七年
記し主佛判　又永正七年八月　三条西入道前内大臣　永正十三初冬
逍遥院等の奥書あり　又一本に一華堂乗阿の手蹟のちに寛永廿一
年遊行三十六世他阿上人の假字の跋あり

一　葉抄　写本　十五巻十本　同上

才一　作者の事　作意の事　時代の事　諸本不同の事　號号の事
源氏の事　准拠の事　等あそして上にあるを注釈す　引ち八　花

河一禅一擲和など一二字ずつあり○奥書にいはく右十五冊者正
存以お説宗祇禅師弄花諸抄等之編之云々　明應乙卯孟春仲旬
肖柏

細流抄　写本　二十巻　西三条公條公

此書も河海花鳥のはやまりおほかたをしくえらび取つて花説
の説に河海の説をもなしておき全體ハ弄花をおほかたしくるべき
ものなりとおもひけるべし

明星抄　五十五巻廿本　西三条実澄公

此書ハ細流抄に発端一巻をくはへてその上に小補せるものなし
発端に諸本不同の事をとりてくはしく河海抄をもかねてあげたり外勝定院
殿作よりはしく朱墨をくはへたるもの又耕雲本の奥書をあげて云ふ
内なるもの青表紙をはじめ一校合の本とし耕雲本にあひて
史記の…史記の索隠述賛に擬してしく巻ごとに
の…耕の…末…巻ごとに…のせたり

文段などにてハ漢学者などのましハれしにハたよりなりとすれども作
ぎハ相違のあるより用ひがたしとぞ　〇又諸抄
奥入　伊行ノ作　伊行ハ行成ノ五代の末孫定信が子也　一切経一字そ
かきうつし伊行ハこの国の能書の名を得し人也
追加　定家ノ作　河海ニ中納言定家ノ書ける源氏勘物を根本
作しく奥入と號すとぞ　私定家の奥入ハ號すれバ
の述作の源ハ伊行なりし
水原抄　大監物源光行作　光行ハ清和源氏貞純親王の
後胤俊仲の男也後ニいひしが其流レ誠ニ和学をよくし河内守
となり河内方と称す此ぬる院の御世千載作者也其子式部丞
親行も此道に入て河内方なり
紫明抄　素寂作
源中最秘抄　同上
源氏論義
河海抄　廿巻　四辻善成公作
花鳥餘情　兩中ハ一條の禅閣の作也　此書ハ此頃兼良公の注也
巻之一　其外諸抄ニ〇奥書ニ云此一部永正拾年受
庭訓并依聴書記録心不足更非可令外見不許他見
為叢奥之巣定或人難去所望之間加注之　大永六
仲春十九日　又天文甲午暦千秋佳節終功手　要之字都督郎
主判〇梅ずる此抄の首巻より巻二巻までハ此れも和
歌又假名数の部のすものとあるべし
孟津抄　二十一巻　九條禅閣稙通公
稙通公玖山と号しけるを先陀といふ此書ハ河海花鳥宗祇別
注弄花抄湖月ひきうつしハ要約しく畧しさし兼て不足の
ところハ師説なくもつらしより季吟いて見て貞徳云師外祖父道遥
院殿の源氏物語聞書を称名院殿ニ再向ありて称名ニ先院
殿よ師穿鑿なびしなびしとそ〇自序云入道前右大臣の
講談於聴せしよ河海抄花鳥餘情の意趣ニ当流によらんハ相當
し

たゞしハ此ふみのかぎりなく撰取捨の旨ヲ弄花抄のちに撰びさだめて
其上に於いふべしとる撰再同しく作る合点のものハ愚意なりしとみえたり
所謂の義ハ称をも付給ひしとぞ此物語の玄旨はかりこゝろ得ずしてぞ黄河
九曲八崐山よりいでゝ去るあとかたもなく張騫ハ槎に乗りて去りぬ之より
ゆゑに此秋のはじめに銀河のかけて二星のよそほひを撰かんと五律
ひとつの年のくれを二のまへに来る事を示同封なり此の作者賢
才のものならざるものハ仙術をも及ばざるものなり此一部撰し終る月
も日もまたいはず七夕なれば是を五律もて作るゆゑにしるしとぞこれを
〇此書巻首に諸抄不同等の事を評して巻末に真字の跋あり称
名院殿に就て遊学の次第を此書に記し三光院称名公の諸説を
随して一に奥義を該通しぬる数十日工夫を費して河海をもる
の外なる源氏流の大綱を渉猟して二十巻の抄を作られしものなり
へり此書ハ天正三年亥の初秋星節 齢八十五翁陶化翁誌焉とぞ

林逸抄　写本　五十四巻二十六本　林宗二

巻首に物語の発起の事古来称美の事作者の注釈の中に多く花
鳥餘情 休聞抄 哢花抄 一葉抄 弄花抄引哥 帚木巻の奥書にいふ右
此聞書宗二方正斎之抄更以不可有外見云々〇牡丹花肖柏に聞
ける〇村井古道が平城趾跡考にいふ饅頭屋宗二方正斎と号す姓ハ林氏
原宋朝の人林和靖の裔なりとぞ林浄因といふもの元の帝の暦応
四年辛巳にきたりて建仁寺の栄西禅師に就て宋より渡り此相伝
て此さきはじめて日本にきたく姓氏を改め妻をむかへ南都に住しくらく
饅頭を製造すこれ奈良饅頭のはじめなり其子又宗二といひて饅頭を
製するかたはらに業とす宗二連歌及び歌書をば好みて源氏物語の
抄をば編名付て林逸抄と云又節用集をば撰す林逸抄世に饅
頭屋本と称するもの〇按ずるに林逸抄ハ林逸が抄の誤にして貝原好古が
和事始にも林逸が節用集といへり

源氏紹巴抄　二十巻　里村紹巴
此抄の説くしハ称名院殿より伝へられし巻首に云此物語よりかの差異

いひ定家卿御自筆の青表紙中比断絶の事ありしかハ河内本と見え
る源氏物語披読にもちゐられけれハ河内本とて世にもてはやされ
らさせり耕雲河内本を信じて人々にすゝめられしかなとそ聞えしを
用なし後京明水原両抄も御今鈔もみな河海抄所述纔よりてをき
餘情又同しくこの説定家卿の御本乃御流相はらくおもむきて
志多良といひし人あひたれと表紙付候しては能不審を
一条禅閤の御本へきゝあはせ又ハ一条西府内府逍遥院へ講釈申うけし
とりてその禁中のかゝる事ハ逍遥院及て河の中にわたりけるをいはゝ
称名院及右府逍遥院及御二男逍遥院及にもこしつたへて御才覚まて古
来にこえれる或ハ甚だ御紀明あきらかのし佛教儒道和漢のふみの通
達のほかなるはしそるのに諸家不同あき中書の差ありて正可
限二青表紙河内守流両本也後成卿又よしとせられたまひし○此書一
名源氏二十巻抄よりて

休聞抄 写本 二十巻 里村昌休

連歌師里村昌休の此書し昌休ハ昌叱の父也

花屋抄 写本 四巻

作者つまびらかならず書體小さくして和歌抄かと似たりあれの路
まちげんじ物語をもちゐ京明河海花鳥せきたの注あれも抄てしれて又
三賢一覧といふもの其すぢの注をきゝとゞまらずひろくこの書の
はうるとかくは其ときかしく人氏の名よまりせあしよそこのすもの著し
ゑくおもひあり女どもの相なる所でうへのゆる所にてしつけ侍るよ
おさなきさん女たちのためぞうかたれぞまんれ書ゑらしくしてよせ
られ候つけ侍し兎葉なれどもまづけつ花鳥おしらかしてを
○此書ハ語の詞の注にくれてはじめよ巻の名のうち諺

岷江入楚 写本 五十五巻 中院通勝卿

のかずをねむりかずえもり
通勝の丹なる容あつめしあいての著述しこ定家卿の奥入并
ちかめ京明水原河海花鳥弄花細流などの説をみな先師の

諸注の説をいだし此今案をもくはへて注釈せられけるとし舟
於の南君云旨は下りよりも此物語をもてあそばん念深なりともの
ミく行きの抄出を以り初まれことろ沢がしいあまたの古来の注釈
抄一流のきあよそこしあはむつきくぞとなりしでもそれにいまと
えしれざりしをはろ此をかせつまなのしめかがよしつこうくつる
此書ハ成るとし題号ハ山谷の詩よ岷江初濫觴入楚乃魚底と
いつんなしめりこすハ此物語の抄出定家卿伊行がみつ作しわりを
巻と此号をは勘へくえへられて奥入とかかげられしを濫觴と
して世に此物語よそふるのの注釈あげくるにあへりかうきわ
も深く底もあられ海となってく見るかからめてさしろに趣多
ふりく佐つの自序るんありて其序の作さまはまで来のしるれ
つぎさ代中の九日也足の春秋しきりに生かりしうれあり○又
幽斎真子の跋もも也足軒主素然老人以有識詳作之素縫遠帰
隠栖邪丹之後州老人也種姓不凡才識高明寔一時之名流也

加之称親参三光内府勤侍講帷究此物語之奥旨依之就老
人求果余素頼於是老人忽感其志考之諸抄繁者芟訛
者正缺者補互有得失者両存之十稔之間雪纂露抄畢五
十五帖可謂集大成也余乃題以岷江入楚矣云々○此書本文
の注五十四巻雲隠説一巻ありて諸抄よすぐれて大部なるもの
なれば料紙半面十六行にあつめて板行されけるとす○又此書は竹内
本伏見にありて龍が撰しまた文に入りたるもの

源義弁引抄　二十巻　一華堂切臨

三光院実澄公の講説の聞書なり巻首にいふ源氏物語にいとやし
口伝の条々閑合清談やうにして唐土はこの沢されるなんじ
み词などえなをどいかつてど風流よ歌などたのくのいなてまの
どしよう作る古来の秘事しすこれハ文章などもはや世俗にあ
ぬりしすきしろ此外その料の人の词をけれて幽玄よ下児のまで
ゐさハりと女の词ハやさしくるよ作此词ハきすしほとしる名など

さうてくもてもはの詞ハなまにはつゝすゞろくしもひ遠げく字を行さ
あてよめばすゞくて風流ならず字によれバ一趣滴しうれも中
甲乙ハ詞の大小によりてくわしくわかつべし

源氏綱目　九巻　同上

自序に云光源氏物語五十四帖をよひらきよりいひかく何こその
かゝるうちにあまたゞしこれ疏し今まさしくおこちくろ此中のる
ども稀なり。まるし連歌に用ゆべき詞と歌とを摘出しくさへ作り給
むかしよりみけ源氏に人みなよろしひの作にいたらずあやま
りおほしこれぞ深くつゞきの詞をのせ後なからんことをおぼつかなきこれがた
めに一部の大概をしるし翠竹閣よりつゞくかれぞかゝげし源
氏綱目といふ于時万治三年しるしぬ吉辰洛下一華堂様伝
野衲切臨これを輯録す○巻首に作者の事発起の事
時代の事又ハの事大意の事などの事をしるし切臨の考あり

源氏物語一部連歌可用詞　一巻　写本

撰者詳ならずされど源氏物語一部の中より連歌に用ゆべき詞を抜
め出せり

光源氏一部歌詞　写本　一巻

巻首に序あり是ハ此物語の起りを述べし一部のうちの歌を
もてはやしたる詞を採摭す此書も撰者つまびらかならず

源氏大概抄　一巻

一部の大意をつゞめしるしたるものなり作者つまびらかならず

源氏物語目安　七巻　三本

これハ源氏物語一部の中の詞をいろはの次第にあつめて注釈し
たるものなり一名爪印といへり○半截本小本等に附刻す

源氏物語引歌　一巻

これハ巻々の詞のうちに古歌をとりて用ひたるをえらみて注釈し
出したし○奥書によれバ此引歌これたゞよりひろひあつめけ
らず今よりしく書くべくすべけれどとてもなほすなりうきくちを

何ぞやといふにつけても作りしぞたゞの大和のうたのことばをかく
けつられし作り○中居宣長云物語の詞のうちに古きうたの一句
などを引出しつゝその一首の意をあらはしたるは此句のつゞきの
詞のうちにあるべしとかはる引歌といふころのことばは大かたの河
海抄に引出されたるも近たかなはざることも出でくるは
の抄どもにもさらにあるは皆河海花鳥に出でゝかくし出ることは
河海抄に出されたる引歌のたぐひも大かた詞のたゞつゞきてあへるもあり
ゆゑに此歌もそのことをも知りがたくて引出されたるなど作りは又
古今の作りぐさを見ていまそうなりとも見すぐしがたし
まかり出たるは安沖もまたいはずしてこれまであたりさぬをと
あはれにゆくゑもしられぬものともまた用捨すべきなりの
抄ともにもみえたる考あつくなだ河海をはじめとして見ゆべき
かぎりをとりすぐしすゑつくるかなしくさへありぞ又河海その外の抄ども
にも引歌未勘とあるもおほくいふなれそのちまたにおほかる

ゆゑかれより考つくり見るにもあらんとぞかくしてよく○此引歌何人
の撰ありしかは知らずこれも古註なかなか半分を附録す

萬水一露　二十八巻　二十二本　能登永閑

此書河海花鳥弄花細流等の肝要をとりてまた其説を省略せ
ず古註をつかんは華の二十八品になぞらへて廿八冊となしたるなり○
應元年十二月の貞徳の跋あり○巻首に源氏物語聞書
と題して　此物語作者の事　物語の作者由来の事　時代の事
大意の事　古来称美の事　紫式部の事　物語書きはじむる
号の事　此物語源氏と号する事　源氏姓を称する事　五十四帖
巻名の事　四諦法門の事　四門得道の事　三諦の事かずかず
し巻末に雲隠の説一巻を附して○此書は物語のかみを
全くしたがう作者永閑は月村斎宗碩の弟子にして連歌をよく
したる人なり○此書は貞徳の孫なる世の中にかくれもなき
公家の伴家に八月ひろまがし烏丸光広の作せしもの

山路乃露　一巻

此は源氏の紙数にもれたる夢浮橋の巻のおくに書つゞきたるやうに世に流布す
伊行の作といひ傳へたれど二条家にハ用ひざるものなり○これハ
或本小本等に附刻す

源氏雲隠　六巻

并一　巣守　　并二　桜人
并三　法の師　　并四　ひさうし
并五　やつはし　　以上六巻なり○此書其六巻の奥書にいはく
雲隠六冊元源氏物語全部著者也紫式部観音宝殿に奉納す
此ゆへに菩薩に秘本当寺に什物や　康平元戊戌暦正月日
石山寺座主僧都信誉　又いふ石山寺縁起霊夢によりて此六冊
を後に住持法印の宝蔵に奉納すと奥にかきそへ應永
某九月二日正二位行中納言藤原親乗とあり○此書のよし偽
作なれば奥書の妄誕いふまでもなし○按ずるに此ちかき六巻とせ

るハ源義辨引抄にいふ雲隠桐壺巻より十三巻名地水火風空識の
六にとつて一つに聚合すれバ万物みな神秘にしやし解散すればなに
のこりもなく顕れ隠しかたきものなし巻の名をもてしもいはく
その上にあら一部の書へ佛法の眼目とする

源氏雲隠抄　二巻　浅井了意

上に峯とよりもふる六巻の偽書のほかにしくしく合刻して世に行る
序にいふ源氏の名所の内にその巻に太上天皇の号をかうぶる
なの上巻より四十の御賀に至り幼き巻十二月晦日に終りて此雲隠のな
の巻ハこれより正月一日よりおこりいまたはじめにせしとも
らひ此巻に至りてハ　やつはし　さらぎ　花の宴　浮舟中
巣守といひ今出なる　すもり　桜人　法の師　ひさうして
八構といひし案ずるに花の宴と桜人とは同じくひさうとなさたる回じ
く巣守といふ八構とハかへるいつ名ありをしらずといへどもけのかた
ち巻にもや世に出でさかハかれみれぞいづれも作者にさだめかたし

すべて人よく知るものなし 延宝五年刻す○或説云源氏雲
隠は六帖ハ洞院之輔の作にて、いまだ作者不分明、一条禅閣のいはく
しかれバ系図のはじめに 撰人 巣守 八帖 さくら人 花見 さむ
しろ上下とも、くはしく物言作り加へて、名とまぎらはしく○撰ずるよ
李吟雲隠の作る愚悔ずるは世に源氏物語六十帖といひつたへ、ほ
てただ五十四帖にて雲隠の巻あるべくもあらねば、くろうとりせう
さあるべく、みなかくのごとし、つゞりこれする者の妙術なるべし
諸抄にのせられず、あるよしは撰人雲隠の巻物をかなひ撰人巣
守剰鐵八帖桜嵯峨上下などいふ巻抄しきてありて六十帖の数をとし
らしめんとやうなる補作ありといへども、かれ是もかきつゞけ、れ
ものの系図のおくに巻の名ありともしるしをもせたまへしいでも
何よりても一言も用ひたまはず、かの作の法は一切のもの作ともと
よばれぬものなれども信用にたらぬものなり、ゆゑ此物語六
十帖ハ天台の六十巻に准せりといひて天台六十巻も止観に関係ある

およそそのかみ紫式部ハ、雲隠の巻は名のみにして六十帖にしたがひたま
ふあと書しるし給ふや、此雲隠の八帖かけるは光源氏朱雀院の崩御致仕
大臣髭黒大臣蛍兵部卿等の薨其外女三の宮なども皆卒したまふよし
を人々の官位昇進のことなどこまやかにかきたる書趣なるの
巻に影のあらためてかきつけたまへり

源氏外傳 写本 五巻 熊澤了介

此書の題名ハ源氏物語ハ表に好色のことをかきしかども実ハ好色の
ことを作り出せるにあらず、此作者の世の末になりゆけば代の風俗もうつくしく侈に
流れんことを歎きてかゝるべきの旨ハ人にいましめ近づけざる
人なれけれど世の人のこゝろにいたらず、これをよむ人ハあやまりやすき詞
すくなからず、あまたかきかへしたらず、みなすべてよくわかれ
ぬ世はいひしりたる書をさても此論なる旨をしるしたる
かくそのへだてのなりとけしきなずたかぬるとのことをかれぬよ
なしく其中に一つの人の荒風をもちいがたくもしるし

残せしものなれども荘周が寓言に類して作られたるとひ昔
の人の今は人のものやまひもろこしのものやまとのものとし近
てこそすこしは珍しとも其は実ハこれ證跡ありてまたなし近代の人の
おもしろきハおよそ源氏の君とこに好色の人の名を仮りて作り
おいてつくハ古今和漢の故事をみな時世のことまでとりつくしおき
せしこともありし紫式部が父なる時ハ博學多才なりしく國史ばかり
けれんとて下さざりしとて紫式部といひしかるとも書かしいふ
いつそれ此物語ハ人ハ好色淫乱の書なりとはからしせず作者の奥意に
んはつけし書中能く評さだしこれを知らすべきはしろくてえ
損多くく益すくなし夫日本王道長久なるは八禮楽文章を失
はずして俗に落ざる故をもていにしへの礼楽をまもりつたへ
けれのかうの残せし故に此物語ハふかくまもりて古きをかけりつたへ
上代の風儀礼の道くしくもやる楽の和しく優なる所
男女ともにこれ常に雅楽を翫くいやしからぬこころもちいし

次にハ書中人情をいつはらずして人情を書きあらはせり五倫の化を
うしなはずして其は處まてハ國の政事をも家のことまでもさながら
よく此物語にしるしたるまでもなく人情をつくしおき且時勢の
人のうつりかはる事をかきあらはして歌をよみ詞の末までも言葉の人
氣にかなひ候にさとすを事とすこころをつくせるにて此物語にまなく
情をあらはしてすこしも好色のすぢにはなれず其世の風化をとくしりけ
世の中なるも音楽の心なくてハうつり平井のあそびハ君子のわ
ざなる故に管絃のあそびなくてはならぬ事にて風俗よく凡情に
ながれのしるし此物語自然と人の好めり好きなりけりにまよはぬよ
わく世人をもていましめぬ明君の真を正しく用ひすまで残しとし
見んの心にうつりかはり其ないといふ世王者の遺風
をたふときまたんやこのたび順化院も此物語を日本の至宝とし
おきたまひてまつるもおもひつきとこころハうつくしき礼楽のためにまなぶ
中人已下の人ハうれぬ深意をぞ記しておとせるハ婦人のを

うあしく書しけりたまひしけるを〇なかれたるかく五十四帖の大方よ
でりしずそれも論じまうしく論じそれなハ伝秘抄にて古奥
書ナリ曰右源氏物語抄五巻熊澤了芥翁所作也曽聞全部五十四巻各
抄出之中院内相通茂公潤色之且擇切於時事去為五冊也全部之
本各冊内相自以朱批校之本云以執齋之本敬写畢　享保庚子
夷則初九　竟臣

首書源氏物語　五十六巻

本文五十四巻に系図一巻年立一巻を附す諸抄の説を頭書し万
事一覧のためよくしりわけたり作者しれず

湖月抄　六十巻　北村季吟

本文五十四巻　発端一巻　系図一巻　年立二巻　表白一巻
雲隠説一巻　惣計六十巻なり
〇此抄は趣意凡例にいふ先師箕形如庵八条宮に奉仕より此物語の講談
を受て十五箇の秘訣三箇の口伝までを伝へ又先師逍遙院殿ならびに

相違一巻の注釈を加へて此物語の口伝奥義を伝へけり此如庵老人
ハ称名院殿三光院殿より相伝して八条の宮の御前にても講
説ありけるとかや其故に此講釈ハ細流抄にくはしく見えたれ
ど又逍遙院殿ハ九条の東光院の君にさづけ給ひて九条家に此物
語の奥義をさづけて後九条の太閤尊家公の御許にてあまた所の
意をしるされしをそれハ常に孟津抄と名つけられしとう
て此抄も細流孟津の両抄にもくはしく河海花鳥の要説より弄も
明星抄ひろひ置けるところの説までも皆これをあつめ僻案抄をも
て初心の人のわかりやすきやうにしるし又素累諸抄を勘へあはせて
季吟がまよくかの説ハかつて諸の説又或ハ或ハおのれがおもひよる
かたし又は師説をも用ものハ皆如庵老人の説明孤士の説ハ
季吟一のしるしてかけり又三光院の御説のしるし御説行にし又は
諸抄の拾遺の下に愚意の了簡の説をかくすところハ愚案としるし又ハ
しるし〇発端条目　此物語作者のこと　紫式部系図并に傳大意集

は等、紫式部と号する事　式部廣才の事　物語の發起　文法　此物語古人
大意　物語準拠　物語時代の事　物語述作の時代　源氏姓の
称号の事　題号光源氏物語と称する事　源氏守の事
事　物語冊数の事　巻々次第　諸本不同　諸抄　凡例
巻々名の事　此物語并の巻に付する事○此は近き世の作なる○
本居宣長云注釈は河海抄を第一のものとすれどもさまざまいはれ
たることあまたあれどもひろくしずくならず抄の方はやすくもろこしの儒
仏をもちゐ此書をもひろく考へ引しく何をもをさとしのこれ
くはしくあきらかならずそれは花鳥餘情なり河海の何
やかるところをよくまなぶも猶考へくきかすく
たらぬこと多し此二の抄は何ならず見ではかなはぬものにて
何やかもいとよく語の注などいはしきのこと多くして
かくし其は弄花抄細流抄と河海をむねとするの説抄なれども老
くさくらふこみの中抄孟津抄岷江入楚万水一露湖月抄なと
れとさへ頭書(カシラガキ)やと標注をもくはへたれば[illegible]
もとよりいくたびすりつづけられたる事も其中に今世中にはあま
ねく用ゐるは湖月抄にて此抄は古注どもをもひろくのせあまり
れくはしくして傍(カタハラ)よりも引出す注(イデシャウ)を今案(コンアン)をもまじへず
ことばもさすがに書なしたり
志のぶ草　写本　四巻　北村湖春
湖春は季吟の男なり○先にかりがみ(ムゲダイ)十帖源氏などの抄(ショ)をもて
此物語の大意(タイイ)をかきあらはしたるもの(?)いかにもやさしくかきたれども
ことさら人の為(タメ)にかく(?)しるしたるものにてあたらしき事も
の(?)なかにはくやしき事もかきなけれどもとなりけるものにて
春くのしらいてことばをもてはなれ(キウギウ)が一毛(イチマウ)ほどもなけれど
又しろしめしけるの後(バツ)よりけることの條とすとしたる八医(イセイ)なくて
て湖春の老(ラウ)病の人のときかば愈(イユ)こえたるこの書を(?)まなびしく
(?)とられてきこえけり一部の趣意(シュイ)後悔(コウクワイ)みたどりせぞうちきらるの

かれくさといひし也小読大概抄の教へ拔群にして耳ちかくすゝめ
やさしきのみならず名づけたるは此書の末に明春の年二月になり
みえけるよ
　りみるといひそれらのものたのもしきよきものそれにならへとすゝめたりけるは

十帖源氏　十巻　立圃
巻ことのはじめに其巻の大意をのせてつゞきやすく繪をもそへ
給ひも入たり立圃の所作也

おさな源氏　十巻　同上
はじめその書も其作者とかく児女の為に耳ちかくつゞき
やすく作りなせるものなり自序あり寛文十年刻

源註拾遺　写本　八巻　契沖阿闍梨
源氏物語一部のうちにて諸抄にもれたることどもはもちろん
すぎたるところ誤れるところをもしるし古来の説ども次第にくはし
くして誤をたゞしぬるは別にて中諸抄に考へのせざるをも抄

ひろふことにて拾遺とは名づけたるとし發端一巻あり河海抄のころやま
事どもは抄にはげまされのぼり此物作者によりては更科日記をもめ
かたしとかや我は此のせ其餘狭衣の此物作者引よらまなは
歌のりは源氏君抄の明する説ずは誤なりけり式部が名のり此物作
式部の作なり時に作者は物かたりなかりけり勅撰集の此物かたりのえらびぞく
ろゝ諸抄は此物作の大意につけて用ひなかば論なり
みえ古抄の作の褒貶は資治通鑑の文勢司馬光が詞に似たりとい
ふそく今案此説の誤し通鑑は宋英宗治平二年より後年日本ね
注文治暦二年にあたり此物作におくるゝこと六十餘年なれば
みえ古抄に台家の化義化法の両様の四教などの説に似たりやとし
うけ物語抄ともしきを抄しすぐくみえたるもの多かりけれ
ほかけるに其の日記より住吉物作よりも長歌あり五十餘帖の中にも八
みことなるべきうたの類なきとはもろくけれども詩文に長短
のかはらずともて長歌はなかりしやといへり みえ毛詩関雎

螽斯等の篇ハ后妃の徳化を示し鄭衛の詩ハ淫放をいましむ是美
悪水火のごとし但文章にありてハ鄭衛の詩もすてべからず此物語ハ
人をいましむる美悪雑乱せりとも論ずべからずして只其趣をいふべし
すず定家の卿の可翫詞むね言葉のごとしとかや又此物語流布の
おほよそ普通の假名をよみはべるなかにある事も又假名ならず
またよめる堪の字此なりけれハ太布なりとも太田とうけられし以下の諸
説どもも古人未發の論なし

紫女七論 写本 一巻 安藤為章

此書七論ハ 才徳兼備 七事共具 修撰年序 一文章
無雙 作者本意 一部大事 正傳説語なり 書ハ年山先
生伏見殿貞致親王の御諮に作りし時この物語などの中務
大輔久仲朝臣の講談ありて先考定おほせたるの書なり 其下の
通村公の時よりしより来風ならびに鳥丸資慶卿の時ありし乃後傳授の人
中院亜相通茂卿の時ありしを傳授せしより水尾院の御をうけて

よんばかりかかれはならずして彰考館にして李部王記小右
記權記左經記台記玉海玉葉明月記以下近き世の二水記などまで
百部ばかりの記録をかし故實を作くハやし不審の論をもけらるさ
よしぶ紫女の筆ハ今の世にいふやうなかりしが其式部の世にかわりて
あかしよみかへる章段をかけられりとおつしゃる此又神に情態を
むかしのをもむきたるもめるをもかうくして海ならず菜からぬ
櫃にまぎれけるも雅俗の色にて志隷名を書て
沖河闍梨のいろいろありて万葉ふるの不審なる傳受せしにつきて
ぞそのけうれ此説の次第も今案の符合しけるをも多からめハ
旅の家の友かけてうちなしかぶりなけれ其の筆物の傳きせ
らしも此説をもとむるのせよ
かくてそ此物のやうにかれをあはれなりまたのまへの系
よりうつうる時にえ孫十六ゆをうの月〇次々の有系統ありて
其和すまて

ひとすぢならぬかたくもじきのゆゑをまもあやさしの見ゆ
これには備りて校合すること見ゆ○又香竹居儒
資址の説によりてこれすなはち寛文三年五月河内國大塚のまへかう以
上梓せるよし見ゆ
そもそも是をなみとてよく見るに紫のさうしのこときわれり
さりとて作者あやまり○それは此書へ作者の作ならず大
かたの物語もしく式部が才能の紫の化に鑒てしるすものか
このころのよむに有益のものにして其本文のかくのまへ若よう
才徳ありうよなうかふかの丈夫ものとをもあもまへたやすく
女をとくてハやからうへことめにはふかふてうへに源氏物
語の論するに紫式部が英才にの称をもつらく實徳か見え
されど物語のなかをかくそれとて式部があやまちのいふし
まつらふ物作と紫の比とめよしくをかの氣象をも見ゆる事
實か老ふるやうよこハ何と人をかく才徳兼備の号をふし○巻

首ニ系図あり巻尾ニ尚友軒牧因叟跋語あつくあり奇評確論
可レ謂物語指南

源語詁 写本 四巻 五井純禎

此書ハ物語一部のうちにて解しがたき句などをかつ部をわかちいろは
の次第によりてひとつひとつくわしく例語をあげてしるしけり

源語搉 三巻

天地 時候 人倫 支體 生植 氣形 服食 器財 人事 虚詞等の
門部をわかち巻とし詞をいろはよりつゝくるまた此部ニ収めし歌
どもを一契の字を附けよるびハそれをしるし源注拾遺の説を○此書ハ
作者をうかがはずといへども源語の源語詁をしるすらん者ものよし近
き中井竹山辨を著しく附刻す

源氏掌故 写本 四巻 有賀長伯

物語一部のうちよく世をみるにうつしさまれることはつまはひ詞ある
ことのかいしよりてとめるそとのいそ近神のうらをしかこまかう

紫文蜑の囀　五巻　多賀谿醉子
物語のかな文を俗語にやはらげて刊本に帖のことし首巻ハ摘趣
凡例　二巻　きりつぼ　二巻　はゝきゞ　四巻　同　五巻ありせしと
享保六年甲陽府中仕官多賀半七著といふ

源氏男女装束抄　二巻　壷井鶴翁
源氏男女装束抄二巻ハありし永正年中連歌師宗碩のあらはせし本にして
此抄ハ其外の花鳥餘情なとよりところせましに河海細流弄花
等の説をあひ奥書に右一冊者依數寄懇望令附与于藤原祐梁者也
永正十四年二月七日宗碩花押とあり尤宗碩が管見の大概をしる
すところしくいまだ明らかならず此抄の中十條を康映
か此書を好く衣裳の名称をひろへ雜涂の定式としてよろしき
此抄お凝にあらしく位袍雜袍禁色晴褻等の装四時の色目を
あらく概これを述あらしそ康映原本の志をつぎて上木せん
とせしがやむことをえずして元禄九年の冬秋校を録めくせし
此抄は鶴翁か此書をよむ家々の説々をあつめ異同ありて此取捨
すべきところあるものハ挍く闕くハ吉論ぜず此ある物あらて滿
たる書多く其操なとはじめくせしかハしめず今に板を改め刻
し或ハ上に註し下に照し或ハ下に註して上に首書しその
取捨すべきものを擇くこれを折衷し人をしくもろの惑をと
かむとせしとなり　鶴翁真字の自序ありけり○後附一巻ハ四
季の衣のいろ　同表着のいろ　同小袿のいろ　ひとへのこと　おなじあわせ
襖のこと　あはせかさねのこと　扇のこと　くらゐのこと　胡曹抄衣乃
いろのこと　藻塩草衣のいろのこと等を記す　此書あり○奥書
女官餝抄胡曹抄藻塩草之拔萃者滲邊康映後附也又
少補且所々加鼇頭畢　又壷安著○巻首に享保二年正月清眼
昌億序あり

源氏物語歌　一巻
刊本にハ源氏歌鑑とあり　物語の中にある歌七百九十餘首巻を

遂(サフ)ぐられけるよしいへる名義所なり實ハ紫式部一人の作なるべく
ふるし○要ありて袋草子に古物語の名を撰集に見えたるなしとせし
かやは拾遺雑一房家の時頼
桐ひとつたちもまり宮に時ぞまるる月もすみける
これハ源氏物語せしもの作ハ入あらまし作にも作れる件の物語ハ
紫式部が不作(ル)しるしもあり今代中より夢よりの古
のちあらたの物にはたり古はおよび書つくれるを見て今案とおもひうち古
が入源氏ハいりけるの今代源氏にハいることなりし雲隠の巻なくば
くまく源氏嵯峨(サガ)院にハくよう中よりかしく式部なりむかし入て
かくしく又が物用いて中に時代(ダイ)を古物にもうきてやさ
まてるハこれをし一代ハお時にならせられてやさくのりのそうの
えしま集に入る伊勢物語ハ是のしし拾遺ますます
(拾遺三)拾ひらかなみの物語うまれうちあらそ何をめし物にいはんいはい
(拾遺五)物語のかしなしやかのするそのうちのぞめてあるいハいうつけるん

此二首ハこもより後なりとうさし○今案ずるに源氏物語乃うちの
勅撰(チヨクセン)集に入りたるハ一首もなし新拾遺集雑中に於きて紫式部
心ハ入れ給ひうちの城のいちはやうなりけるさき
これハ後身の巻の薫(カヲル)しもかのつ御しくまちびのいるな
らひよりさらさてのうちにたらしさ

源語断(ダン)錦(キン)　写本　十巻　川上静菴

天地時令(レイ)人倫(リン)人事器財服食草木禽獣寺乃部類にわかちて
語の文を截断(セツダン)しくありて部に収め作文(リブン)家(カ)の採用(サイヨウ)にそなへ
よりす○静安遮莫(シヤバク)と号し又陶江(タウカウ)翁とも号す浪華の人

雨夜物語だみことば　二巻　藤原宇万伎(ウマキ)

此書ハ箒木の巻の中の雨夜の品定(シナサダメ)のところを注釈なしてあるを
ひとつ今の世の俗語(ゾクゴ)にうつしかへてしるせるなり
のえやすくせすうんなよりけるさかしらなるハの傍注(ボウチウ)をそへ
ひおほせぬるしもそのあげつら此書は注(チウ)せり趣意(シユイ)ハ安藤が章

入紫女七論に拠れ下の女ごゝろのありさまハかつて源氏物語ハよき
せずほしされどかつてよしとするもの白夜のものがたれるさ
めでたきハせめてものがたりにかゝるくだりの人のうちさしむ
すあはれとも見たれば見るべきをしてかくまでやさしくしつらよ
よくかく俗語をもしつゝなすをいふよりその自序なりび
に附言に見えたりされど此物語を注しれ趣ハいはゆる昔年賀茂の
真淵がしるせしをひろく論ぜしものしるしもはるに今も
ありしかれどもかしこきをしれ世わたりにもすぐれたるものとすべし
わきまへし此自序ハ明和六年十月にかれたり宇万伎ハ馬淵の
門人なり○巻首に上田秋成の序あり安永六年初夏上木す○按ずる
に真淵の源氏の注釈もつとも世に流布せず本居宣長の玉のをぐし
あるは五百か縣居翁を此物語の新釈をいへるのはかなくハたゞやうよう
またいはれたることども此書抄之見ずたゞされ憑考したる一巻抄之
しかるの趣大らしく契沖が勢語臆断のつゞきに似たる新釈の例とをあげ

らまでゝうしたゝ此新釈のことを宇万伎もいひけるにやあらん

源氏物語玉の小櫛　九巻　本居宣長

巻首に宣長の歌あり

引歌のことハ〇しかれどもすぢを考へてしるしたる
此書の趣意ハすべてもとよりしれたり此物語の諸抄のはなやかなる所
考へ損じの其ならるをつゞきものしたり湖月抄の係るを
正せり

巻之一　すべて物語書のこと　此物語作者のこと　紫式部がこと
いにしへのしるし　作れる時世　此物語の名のこと　准拠
くさぐさのこと　註釈　引歌　湖月抄　大旨　巻々の詞を引証とす
巻之二　大旨　巻之三　改正年立図　巻々年立　人々の年立
巻之四　湖月抄よりたがひ考へておもへの相違のこと湖月抄の誤
ことごとくあらはせり
巻之五　巻々此本の注古本の注釈にまかせるをまたおさへてしるしたる
湖月抄などに所々紙号をあげたり

巻之六七八九　同上　巻首に浅井氏高の序あり

紫文要領(ヨウリヤウ)　写本　二巻　同上

勢(セイ)え大抵(テイ)上に目じるしのごとくしの旧稿(キカウ)なりしを一致して右紫文要領上下二巻ハしかしながら丸かんにあはせたるものなれバ此くつかえしん御ひかめくさしれハん元にあはせたるものなり合(ガツ)せ附侍のおもむきをしるすハ諸抄の説と雲(ウン)淵(エン)の相違なりつくえんく阿やしむかしかれたる　宝暦十三年六月七日舜菴

源氏年紀考　写本　一巻　同上

源氏君年齢(レイ)の事諸抄相違の義を改正して見易く改むべく白文より推(スイ)すの巻をおもひて一条禅閣の年立を遠ざかるの諸論じ又源氏君の外人々の年齢の事をも考へたり　奥に源氏の系紀図説(ヅセツ)一巻を附(フ)す

手枕　一巻　同上

六条の御息所(ミヤスドコロ)ハ源氏の君をうしなひしめたる事を御息所の文の體に擬(ギ)してかけるの巻ハ夕顔の巻との間に補(ホ)ふやうにかけり

狭(サ)衣(ゴロモ)　八巻　大弐三位

何海おなじく紫式部ハ賀茂の官女なり相伝へて上東門院に陪(バイ)侍(ジ)す後に右衛(エ)門佐(スケ)宣孝(ノブタカ)に嫁(カ)して大弐三位雑(ザフ)句(ク)　狭衣作者御生(ウマレ)○此大弐三位ハ名を賢子といひて大宰大弐高階成章(ナリアキラ)の妻となりければ一条院の御乳母なりき之位を賜り大弐三位と称(シヨウ)して狭衣を作(ツク)りて此妹御辨命婦といふ源氏の御乳母となれり此ハ栄花物語の楚(ソ)王(ワウ)の夢の巻殿上花見の巻並等に考へて知るべし其ところハ源氏物語成(ナル)で四十年もうちにおよびけるのなりそのつくりざまもの巧みかなりけり人物そのうつりかはり源氏の君にしてハせし○此物語ハ母の事を作れる源氏をのぞむの事を細ふかくさらのりてえらびれくしものかけのさまはさぶらひしきもおかしく抄ちもておもむき

のくはうき撫でも侍らぬまゝせたまはずところせうおぼされ侍りて
おしけれどおほく昔のしづき事どもはいよ○ばからひとりく出し
めづらしきまゝの光源氏の子すまのしるよまた侍れまびたまひのえまま
おもへずしやすらく昔ぼされり　みえまの侍りぬちはずらハい
しゞふうくしのほりゆうしせたまひくまししくひりくハこれ
をりつべきやもとしきせたまふ　みえはりつことうしひつ月よせまでせ
たまひくられやもしのはゆりんられそかしとや光源氏の
のゝひりとそのやことハのさしまへちかれ、侍らんするとめりしうき
はつあれまつるえずもたうりろ○安印ニ右狭衣ヲ源氏とひけるハ
おほ時作まりとひけり母のうしれをのたれどもさしうつもとても
つまりのふらうわれそよりしくまりしく引用ゆゝ僻案(ギアン)ホ云ハ
狭衣の作者大貳三位ヲ行ずまく○今丹升甘八一華堂切臨(サツリン)が
よまりむゝるかのしまく目録のまゝ出とのぶつのるしも加へし
系圖一巻下紐四巻を附刻(フコク)す

狭衣系圖　一巻　逍遥院實隆公

源氏物語の系圖にならひて作りたまへるなるべし一華堂切臨の跋あり○今本書に附刻(フコク)す

下紐(ヒモ)　四巻

作者つまびらかならず狭衣のおもかげ今本に附刻す

和泉式部物語　一巻　和泉式部

式部がみづからかける日記なるべし冷泉(レイゼイ)院第四の皇子帥(ソツ)の宮と式部がわりなくかたらひたまひしそのはじめより終までのさまをしるし贈答(ゾウトウ)の歌などをしるせり○奥書に云写本に云(イハク)此一冊借(カル)右中辨兼秀乃本従(ヨリ)去月十四日染筆(センヒツ)今日終功(リヨウヲ)畢(ヲハンヌ)　享禄二年五月朔日右少将藤言継
勅名(チヨクメイ)　寛文十年刻○此書扶桑拾葉集にも載(ノセ)られたり

とりかへばや　写本　四巻

作者つまびらかならず此物語の趣意(シユイ)ハ権大納言にて大将かけたる人に御子二所ありて一人ハ男君今ひとかたハひめ君にておはしけるが

うき世ハはてなひろく〳〵えしなかひ雅君ハそれ〳〵ほく〳〵うち見え
なかしのくいけ花やり女おもしろき〳〵まゐる男君ハはこまこまの
まちなしたまし〳〵女房たちもかし所おき給ふ人え〳〵なま
えもす父君ならしまゐりしの昔よりもし所つなほ
ますべきもとへかけてしおぼけもうけすぞうまゐりしのく
昔しく御几帳のうちのこえけれいりけ名きこひられはう
びうひおもひかけずうつ御のハはさまごまとおもほしのふかき
さく浅日のかたしたまつさしてえ流(十三歳)浦さく君しはこほ
くりかへしの昔しつ浮きて手向をかくそめりしいし
ものしおぼしつくどいめづらかなる昔しかげよえひの君ハ
今まうつらずなりく〳〵おさこしうちものかはらずかこのおさし
てうきおのそこもこれつかしまこゆかぶ御のくはうびぬよ
れのづかさ人くよつく所くゆえかくことひたずすま
しらさおしかりくもろもよ人をとし〳〵すおしまゐの日かい

みしうち野てひろかりしなかひかすすす御后ハ所んはしちとうか
はうさすしく〳〵えずやおぼされけるとも上二の巻れ
なく松節畧(セツリヤク)しくろ八あもひく知らすものし()年山本聞まえて
てえくまや作者詳(シヤウ)ならず彰考館(シヤウコウクワン)の所有合冊しく四冊にて按ずるに
え〳〵や八源氏狭衣などよりも後の作なるべし宣耀殿(センヨウデン)実(ジツ)ハ男也
於中納言実ハ女なり兄妹とりかへて作(ツク)れり

今物語　写本　一巻　信實(ノブザネ)朝臣

前右京権大夫信実朝臣の作なり〳〵数十巻ありしを抄(ショ)しあるよし仁治
書目に今物語廿七冊存(ソン)すといへりされど今は伝(ツタ)はらずこれがうち一巻
なり此書信実朝臣の時代(ジダイ)の歌よみどものことをかけり見聞(ケンモン)の
よき人の手なる事武部が地獄(ヂゴク)まなこするよしへの君かいろう小侍従(コジジウ)が
子の法橋(ホツキヤウ)実賢(ジツケン)が秋よりくは眼(ゲン)ありしをまもる余(ヨ)さまの

今(コン)昔物語　六十巻　源隆國(タカクニ)

猥雑(ワイザツ)のことをもあつめたり

此書本名ハ宇治大納言物語といふ此書ハその中の物語條々をぬき出し
めて今ハむかしと書出せしより今昔物語と号せられしなり今此
刊本ハ井澤長秀か此書を見ていへるにあらすして古写本を
みてかきしものにて凡例にいへり此書もとハ三十巻中にして六十
巻とす其六十巻ハ日本部三十巻 天竺部十五巻 震旦部十五
巻としるし目録あり

巻一より巻十一に至る 世俗傳	巻十二より巻十五に至る 怪異傳
巻十六より巻十九に至る 悪行傳	巻廿より巻廿三に至る 宿報傳
巻廿四より巻廿七に至る 佛法傳	巻廿八より巻三十に至る 雑事傳

以上三十巻 日本の部既に刊行す
巻三十一より巻四十五に至る 天竺部 巻四十六より巻六十に至る 震旦部
以上三十巻いまた刊行せず○此書のうちの物語古今著聞集宇治
拾遺等に出たるもの多し○今昔八世の戒[illegible]
おほかたものしるし

舊本今昔物語集 写本 廿九巻 同上
總目録一巻本書二十八巻すへて廿九巻也全部片假字にてしるせり
紀乃部秘刊本と比校するに文章かなつかひのよろしからすあやまり多き
事数十箇條にして真本にはよりかたきものなし

第一巻 天竺 三十八條	第二巻 同 三十五條	第三巻 同 二十四條
第四巻 同 佛法四十一條	第五巻 同 佛法三十二條	第六巻 震旦 同 四十八條
第七巻 同 同 四十條	第八巻 同 附孝養 四十五條	第九巻 同 附國史 四十條
第十巻 本朝 附佛法廿九條	第十一巻 同 同 三十九條	第十二巻 同 同 四十四条
第十三巻 同 同 四十三条	第十四巻 同 同 五十四条	第十五巻 同 同 四十条
第十六巻 同 同 五十條	第十七巻 同 同 四十三条	第十八巻 同 同 四十六条
第十九巻 同 同 八条	第二十巻 同 同 十四条	第二十一巻 同 同 五十七条
第二十二巻 同 世俗 十三条	第二十三巻 同 宿報 二十四条	第二十四巻 同 霊鬼 四十五条
第二十五巻 同 四十四条	第二十六巻 同 悪行 三十五条	第二十七巻 同 雑事 十四条
第二十八巻 同 同 三十七条		

目録の末に語章合千三十段 原本丁数合弐千九百十七枚とみえ
○第一巻天竺部のはじめ 釈迦如来人界に宿給ふ語 第十巻本朝部のはじめ 聖徳太子於此朝始弘仏法語なり

宇治大納言物語 三巻

これは名を小世継といふものにて又一巻の別本に世継物語とて綴世あなたがたりに向文也○紫文要領に云宇治大納言物語とて今ひとつの書あり偽作にて真の隆国卿の御作にはあらずいづれの人の作かしりてゐるものなしといへり

宇治拾遺物語 十五巻

是も隆国卿の作にて今昔物語の拾遺とし○別本の序に云世に宇治大納言物語といふものありこの大納言は隆国といふ人なり西宮殿の孫俊賢大納言の第二の男なり年たかうなりてはあつさをわびていとまを申て五月より八月まで平等院一切経蔵の南の山ぎはに南泉坊といふ所にこもりゐられけりさて宇治大納言とはきこえけりもとどりをゆひわげてをかしげなる姿にてむしろを板にしきてすずみゐはべりて大なる打輪をもてあふがせなどして往来の者上中下をいはずよびあつめ昔物語をせさせて我は内にそひふしてかたるにしたがひて大なる双紙に書れけり天竺の事もあり大唐の事もあり日本の事もありそれがうちにたふとき事もありをかしき事もありおそろしき事もありあはれなる事もありきたなき事もあり少々は空物語もあり利口なる事もありさまざまやうやうなり世の人これを興じ見る十五帖なりその正本はつたはりて侍従俊貞といひし人のもとにぞありけるいかになりにけるにか後にさかしき人々かき入れたるあひだ物語多くなれり大納言より後の事かき入れたる本もあるにこそさるほどに今の世に又物語かき入れたる出来れり大納言の物語にもれたるをひろひあつめ又其後の事などかきあつめたるなるべし名を宇治拾遺の物語といふ宇治にのこれるをひろふとつけたるにや又侍従を拾遺といへば宇治拾遺物語といへるにやいづれか宇治拾

造物語といへるありて差別さだかならずしも○按ずるに此序
に大納言のもれたるといへるは今は今昔物語のことなるべし○作者
隆国宇治拾遺は古風なるものにてこれは大和物語の一変して
後の今昔物語は此ふりになれどもその趣いまだ古体をとどめず宇治の
本は井沢長秀が考訂しおきしところ多くありてあしかれども
其時文章をよくけちらしもしたりや拾遺のうちにや相つたへ
あやまりおほく○今此刊本は万治二年の上木す

四季物語 写本　一巻　鴨長明

此書は正月より十二月までの公事を詳にしけるさまを巻末に
よしあしと伯陽軒長慶の真字の跋ありて写本なるべし

歌林四季物語　十二巻　四本

此書も四季月をわけて公事をしるし鴨の社司のことをまでしるしければ
巻をわけしはよくこの四季の物語よりおほかたは多くしるしたる僞
にしてあやまりしことも春の部のはじめに序文はなく鴨長明
乃紀の若紫ひろひとりて河のほとりにすみけるなりけん人も
ありけるしるしにてこそ也とも此物語を書かれける物の筆も
むかし論じてありけりとて桑門蓮胤と名のりけり蓮胤
は長明の法名なれば此書今は偽作しるく長明の作にはあらず
おもひあやまりけり貞享三年の刻

堤中納言物語 写本　十帖二巻

藤原兼輔の作といへり兼輔は勧修寺家の元祖良門の孫右中
将利基の子にして加茂川の堤に家居せしかばよりて堤中
納言といへりしるしく帖ごとに目録

花桜折る少将　このついで　むしめづる姫君
ほどほどの懸想　あふさかこえぬ権中納言　かひあはせ
思はぬ方にとまりする少将　はなだの女御　はいずみ
よしなしごと

毎帖このほかに一条ときめくもの

秋夜長物語　一巻

は堀川院の御宇に西山の瞻西上人いまだ律師にて桂海といひし比東山の法印大臣の御子梅若君といへるを三井寺の坊におはせしを見そめ恋わびてむすぼれしがおもひかなひて叡山と三井寺との争ひとなり叡山の衆徒園城寺を焼はらふ事有梅若君勢多の橋より身をなげ給ひしかば桂海律師は西山の岩藏に庵室をむすびてとぶらひけり瞻西上人と称す寺を創せしとぞ物語にて侍る

松帆物語　写本　一巻

一名なし

四條の少将中納言にて侍りしが[illegible]堀川の侍従の君といへる[illegible]堀川の御方に[illegible]桜川の[illegible]小山の[illegible]侍従の君も[illegible]

岩倉の何がし坊に宰相の君といへる侍従の君をみそめてさりがたく宰相の君ほどなく侍従へかよひけるを宰相の君ききて[illegible]身をなげんとしけるをのがれ給ひてあふ事もなくしたがひけるとなん

大納言物語　写本　一巻

これは瞻西の艶書をかき書くる事にて此物語にまじへてかきなせるものなり作者つまびらかならず

女郎花物語　三巻六本

日本紀をはじめ中古近代の勅撰集草子類の中より名高き女の事実をひきぬき教誡となるべきを挙て其中よりこれ故実挙の女子の覚悟すべきを記しつづけ作者つまびらかならず巻末に茶系大貳作とあり

かせり北村季吟自筆にてかけ紙板にせり巻尾に同人の跋あり

紅葉之物語 写本 六巻 蓮心處士

これも伊勢ものがたりより文正のはなしまで男女夫婦の間のねざめ物あつ
めたる巻なり巻々の末に名ある女の歌一首ありて蓮心處
士何人なることをしらず

西山物語 三巻 建凉代山

中古のものがたり記日本紀万葉集の餘波を取り今やうの文章のおもむきと
いへどもいにしへの古語のことばをもてかきなしたるもの
也としてつくしたり

上巻 こがれ巻 さく乃巻 たちの巻

中巻 あやの巻 琴の巻 文の巻 ふかみの巻

下巻 あやの巻 よしの巻 ほどの巻

明和五年二月金龍敬雄真字の序あり同年上梓す

吉野物語一名本朝水滸傳 十巻 九本 同上

弓削道鏡恵美押勝和気清麿等をかたりて物語をなしてつくれ
る物なり詞はふるくもあらず今やうの文なりさりながら
昔がたりの体をもて今の世の水滸伝になぞらへて作れり似よりたるをむ
ねとして似せてかけるものなり○刊本は八巻の一より巻の
十までありて巻首に明和十年正月大神大夫若京が序
あり同年刊行す

吉野物語續編 写本 十巻 同上

刊本八第一條より第二十條までは前にのせたり此もの八第二十一條より
五十條までを載せたり巻末に第五十一條より第七十條までの目
録を挙たり○按ずるに涼岱山友人風月某が郭外金聖歎が評
せられし七十回の水滸伝にならひて筆を是に止む其後は此物語の作者
しらずしてかく其書の風韻を模せり

草子類

枕草子　三巻　清少納言

昔ハ此さうしの名をさだめざりしにや清少納言がみづからつけたる名にもあらず枕の草子といひけり○題号ハ枕ハ紙也といふ此草紙の奥にかきつけたるをみるにおまへに内のおとゞのたてまつり給へりけるを何をかゝまし上の御まへには史記といふ文をなんかゝせ給へるとのたまはせしを枕にこそは侍らめと申しかばさはえてよとて給はせたりしをあやしきをこよや何やとつきせずおほかる紙の数をかきつくさんとせしにいと物おぼえぬことぞおほかるや○これハ内大臣伊周公后宮へ料紙を進ぜられし時后より清少納言へ給はせし一条院の時なり史記をかゝせたまふゆゑそのつまにいひかはして枕とかきてたまはせけるを紙なれバ此草子をかくかくことに名つけたりけるにや○又ハ草案を枕がみにかくしをきてかきつくしたることにや○季吟曰此草紙を

さるのうちの奥書ハ二冊或ハ三冊あるひハ五冊一決しがたし古今和
歌集ハ撰集源氏物語等ハ定家卿の僻按あらざるにせよこゝにあり
作りしむねを演ればいとしこ此卿の作か傍又と作りけり承應二年の至
尾州より一本がもとより上下二冊其中の依るかくは御中古の筆跡な
りとし其文義あきらかならずしかし朱點部し且又人々の作者
考かかしるし奥書に以て両通うつくしこれ作りしハ此本也
也を合せて刊行せしれのうちよりその奥書にいふ
往年所持之愚本紛失年久シ更借出シ而之本ヲ今書写之家藏
證本ニ不散不審但嘗見之所及勘合舊記等ニ註付時代年
月等ノ謬案欲ス　安貞二季二月　耄及愚翁
文明乙未之仲夏廣橋亜槐送寶相院准后本下之本末兩冊
見示曰余書写所希也嚴命弗獲止數年九毫欲舊本不及
切句此新写讀而欲容易故此校之次加朱點畢　正二位行
權大納言藤原朝臣教秀
此耄及愚翁の作人しる勘なり

此作るく朱點ハ教秀てしもの此奥書のさまを見るにありて作られん
ふるくはあらしや　又一本上下二冊堺本とて奥書は前の異本
にあり發端より一紙ほどハよのつね〇のかはれるに似く其次桐壺の
古本かくしてよりて又清少納言枕草紙一冊もあるは
すでに先達のあひなすつまじの奥書かくれもしあれし此耄及
愚翁教秀てその奥書のかれ共もさり古人の見なすつ詳證も
しまれは拾遺千載集新古今續古今萬葉集等に入し清少
納言の和歌書までも皆此本の事さんとてり其外順徳院の禁秘
抄ハ定家卿なを清少納言の記にもさせなしつるとども
又基俊の悦目抄ハ香炉峯の雪の事兼好法師のつまびき
よられける葉の事かしけるも此草紙の此本いひ出しなる
べしとぞ〇季吟又曰或本に此草紙作の日の記に　左中将まゐりせ
のうしきてしが内里ありそしもさまれしあうけるたゝみさし
むしのハいさとしのうて見りけるなどいひふうかれしまやうてもて

おそしくいとしく人しくなりゆくさまゝいとゞつれづれしきをあつめたるなり
とゞしりたる人奥書に云 源経房朝臣西宮左大臣の三男母は九条殿
女五の君後賢の御母也 伊勢守 長徳二年の事也 此草紙長保元
二年の事多く書加給ふ 此事左中将といひし時経房のもとに此人
清少納言のありしをおもひしりて おもひ出たるに 此草紙のさま
とりいだしてみえしをかくし給ふ 経房むさぼりてかくし 久しく
しめおかしかば やうやうよに此草紙世にひろまりしとぞ
されば此奥書には経房の伊勢守なりし時の事也といふ 長保の事か
其後の長保のはじめ此草紙はやりいだしてかくし侍る事とぞ
後撰集にいれさせたまひてはいかゞとおぼえてその世の音色
さんじゅのでいきさらにやすらぎ侍らず 此草紙よ
詳略のあやまちはなるべし ○かの御子ハ清原元輔のむすめ
なりける父の姓によりてかく清少納言といひけるとぞ むねをわけて
一条の院の女御淑景舎 道隆公の女定子妹 の御ゆかりに侍りし

しるされ侍り されば此草紙は淑景舎の御事をのみしるしたるよし云れ
ど此御句よりあたりへもしらずん一条院の后に入一条院の定子
の定子の御かたしとぞ ○槫鴨暁筆第一に云 清少納言が晩年に
は清少納言もむかしの事をおもひしのびくらしけるに
底にしるく人のこゝろあはれとやおもひけん
書つけしものもよくおもひ身のうきをしるしたるにや
ちきみだりぬ

枕草子傍注　五巻　岡西惟中

一時軒惟中の作 しるく少のさかりしるし旧釈をくしくつけり 惟
中の自筆にて以て刊行なり

清少納言枕草子抄　十五巻

此抄は作者のおしなりて巻首に本の差異 先達の褒貶
大意 作者 題目 難詞口訣等のをあつめ あつめて他を
書にあげたり 延宝二年五月刊行す

枕草子春曙抄　十二巻　北村季吟
巻首に清少納言の傳系　此草子諺解あり　奥中のことは
なし　抄者の事　○季吟云　此草紙は中古に季経の抄十冊ありしを千余年
へだたりしかば今は人もしらず　只勘文　此草紙はかしこくも今すこし
あはれに倉卒にて今少しくはしく作りし　禁中のことどもは延喜式
西宮抄小右記抄又此草紙よりは以前なれど其事に似たる事あれば見えた
江家次第　禁秘抄　雲図抄　二条大閤御抄のことは其事多き会の抄　一
条禅閣御抄のことは根源なども此人が記し官位の事は官位令職原抄
百寮訓要抄などは能く用ひ家々の事は順和名集拾芥抄に勘へ名所
は歌枕名寄などいへど此草紙とそれ新たに註せなどうちにはこれ
抄略しいたしては月の行ひ後撰及愚見の勘物よりいせらんくは此
官考系図なにかにこそ補任大系図栄花物語大鏡作者部類
等をもくはしくしらべいたし引歌は八万首の集の中古今之後之集よりくの時代
の撰集家々の集等に勘へ神社は日本紀之代實録延喜式など

卜部の家説なども用ひず一佛法のことは其經文に勘へ古語は漢家の
諸書こゝに古詩は文選文集のたぐひ菅家文草本朝文粹朗
詠集などを用ひしいへど此様の文は十分ならず詳しく勘へ猶
此のほか詩集にはさきにいえど衣服のことは飾抄桃華蘂葉
などの衣服抄など餘情なるのたぐひやうに其のほか式侍秀抄
職の諸抄を記し土左日記大和物語狭衣宇治拾遺古今著聞
江談抄などにも其外ところに見えし是により多く
此書のまつりしすべては用ひ行しくひとつひとつの歌字にあて
しけり○古人の諺解は儀と上にしるしせり巻末に延宝二年
甲寅七月十七日季吟真字の跋にて○桜ずいは此ち代春曙抄と
名づけるは此草子のはじめに春はあけぼのやうやうしろくなりゆく
山ぎはすこしあかりてむらさきだちたる雲のほそくたなびきたる
によれる也

枕草子装束抄　一巻　壷井義知

此書巻首に清少納言枕草紙装束撮要抄とあり目録ハ
櫻の直衣の事 附り下襲并に細長の事 二藍の事 香染の事
卯花の衣の事 附柳の衣の事 二位三位の袍并に其色をそへたる事
六位蔵人青色の事 附青白橡麹塵山形之臭陵の事 又麹塵袍の事 袍の事
蒲萄染の事 あかひもの事 皆練かさねの事 ひきはだの事
附そのかみにえしたる事 古今冠の事 細長汗衫かざみの事 衣
大口そうしき指貫の事 そこゑけの事 革帯の事 指布袴あこめ
雪の比半臂とて[illegible]
裙帯領巾の事 けいしくの事
已上男女の装束ことごとく諸書を引て注し侍りし八義取今案を
くはへたり 巻末に享保十四年四月内人多田義俊あざなは南嶺の序あり同
日刊行す 近来春曙抄の附録として世に行へり
ぼうしぼ草子 一巻 明恵上人
一名空花論といふ 此書ハ山寺にこもりしめ給ひ比都に暮して御ふる女
これより外よ人にまいらすまじきなど暮らうけて 彼女二人のこと
もてうつ人の虚空坊といひつ人の蓮華坊といふ虚空坊母の礼を[illegible]
暮露といふものゝあやしうくおもふよりて暮露とよい今此暮
露僧のはじめの名才の御坊より御中にあまりて保運禅師の
○奥書に云 梅尾の明恵上人の遺言に此箱開くべからずとて杉の箱一
にて近年暦應之○彼箱を虫咬破りて其中にあるく反故を
此皮ハ猿のはしをハ火々でもたけずあまそも皆ずとうけつて一にしたれ
より彼人の遺言かたそへしくひろうて世にすてにけるを
これりうてうろく行つ勅使をいて見されりんを 不はなかくれ侍しを
よくす其ほか世にこんと流布するべし○此奥書に烏丸光廣卿 親筆の
かを以てくなしともすべし
徒然草 二巻 兼好法師
此書の作者兼好法師の系圖を見るに治部少輔卜部兼顕の子にて
ありけるをかくして賛せず記録こて八園太暦にこそれしまあにしるし
しに兼好老年に伊賀國見山のふもと田井の庄に庵をむすび

付生の素懐を遂たりしも此ことなるへし○近き世に土肥経平か春
湊浪話にいふやう此日記ハ上下二巻にて冷泉万里小路の内裏と今
の内裏と書たり此内裏建武二年正月に焼亡せしかはその上巻ハ
建武二年より已前にかきたるものなれハ下巻に花
山院大納言とかけり是ハ建武二年五月に大納言補任ありし
人なれハ此下巻ハ建武二年以後にかきしるされたるにや
此兼好法師ハ正中年中に後宇多院の崩御の時出家せしと吉田兼好
記抄にいへりされと此記にも家園をはなれて[illegible]
双の岡に住すてに十五年の後にふたゝひ伊賀国へ下りしハ国の大
暦にかへりしかれとふたゝひのかへりに著述ありしハ延元二年の[illegible]
ましてつたへて其の上巻ハ建武に吉田双の岡にてかきて下巻ハ延元
二年にふたゝひの[illegible]書しるされたる下巻の後の[illegible]
もかれし都をはなれ[illegible]
そのをりのみつからしるせる兼好か[illegible]此ハ左兵

衛佐として正和文保の比より醍醐天皇の時にいたる[illegible]
[illegible]其時の春宮大夫ハ堀川大納言師信[illegible]
御書[illegible]
[illegible]
[illegible]南朝の下巻此帝の吉野へ[illegible]
[illegible]當代に書[illegible]南朝[illegible]
為吉[illegible]関大将に吉野へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]都を[illegible]伊賀国[illegible]
[illegible]南朝[illegible]
[illegible]

徒然草抄　　二巻　　立安法印
[illegible]

院ハ三安法印のよし　此書中院也足軒の奥書あり

野槌　十三巻　林道春

是今川の注拾葉をひくされよ和漢の故事を考へ出し卜部の系図などをあげ文並姉のよしく風雅集以後の撰集に入る所あけられ金剛三昧院雑毎のこともしのせられ真字仮字の自序後序あり○序に神代より名けられし野槌といふ事見へ乃ことつきしまことのつちといふ名をもちて○按するに日本紀神代巻上云生草祖草野姫亦名ニ野槌一とく　○此書上巻八冊下巻六冊合本十三冊也

鉄槌　四巻　青木宗胡

これハ野槌のうちのあらき出し見やすくしてえらびあまりたる説ともはからひて本書とするもの也　上本末下ノ本末ともありて　寛文十二年四月上木す

鉄槌増補　六巻　山岡元隣

此書ハ鉄槌の註をあけて是を今注か野槌なとにてよ長頭丸か盤斎か句解諸家聞書文段抄等の要領をとれり　洛下隠士而慍斎しるす元隣の号也　貞享二年刻す　一如叟の跋あり

慰草　八巻　松永貞徳

もハら野槌の説をくみてよ一段ことに大意をのべたる也しつらくなるさいふもの也○多くハ義住ゑ貞徳の家の古今伝源氏物語の伝をいひて八決をみなく考す貞徳のいはく是れおほくはやくつよくしらつくなるさいふすし三つれずれぞろとはさかなくつよくもあれ伝受のらけらんねうる法師人こふも伝へんとくつよくもあなおもらへ三箇の伝五箇の秘をいはしてらつれそれれつにつよくもあ八箇れ伝は源氏より古今よの伝受ハすむらのやうしもる其人ねなる人に三箇五箇の伝は述べて人面をうつくし考へめさ□そのへ貞徳のなるまハれ遠きう貞徳も自讃よくそれなる□そのうれぞ八箇の伝よく知らずともやらうくしらいうらふ

よく考てて作者一等も二等も引上てそこしれるもくるしかるべく
作りし長頭丸抄　二巻　同上
これは貞徳自己の考校し長頭丸は貞徳の別号也
徒然草古今大意　二巻四本
此書は本文なし　寿命院立安法印　又顔巻道春法印
逍遊軒貞徳居士　已上三家の抄の評論のこれ合せて抄出する
兼好の事しるしは野槌の序を入れ序も真字仮名ともに野槌の
序なり
徒然草金槌　十二巻　西道智
此書も上の諸註の説どもをいまだしくすこしく自見加へたり
徒然草古今抄　八巻　大和田氣求
無儘　愚明　鈔　野槌などの説を引つけてすこしく自見をくはへ
いとも少く巻首に此書の趣又兼好の系図伝記有り万治元年刻
徒然草抄　十三巻　加藤盤齋

一名盤齋抄といひて前にいふ抄の説に多く佛書の語を引きてあり
儒書歌書の事ども抄せしは所にて　上巻二より八巻まで下巻一より五
六巻都合十三巻とす巻首にト部系図　兼好伝記　時代
題号　大略　等のことを載せたり　寛文元年六月盤斎の自序あり
徒然草句解　七巻　高階楊順
此書の趣意は諸抄家にも出しし一説も誤謬すなく定
めてす今旧説の外に新たに発明の説多く句読
の下にて評を下してよく童観に便すとす　寛文五年七月上木
徒然草文段抄　八巻　北村季吟
此書は寿命院抄および野槌に考へ加へ貞徳説をよそへてよ
しとして簡約にして○○章段は貞徳の説にまかせて之
百四十四段としたり又これ一段の中にまた段を分かちて段は八
二節あるは二節かけてもあるは八節までに先達の説あるを
季吟がはじめて是を定めたるなれど後に出たるは多かりし

明らめがたきの人やすからんあるひはすくなき此抄の成る由あり
しるせり 寛文七年十二月上木す

徒然草諺解　五巻　南部宗壽

古来の諸注の意味をよりはらせし俗耳に通じやすきやうにせんとて
ともまづ一本を文此よりして首書およびかなをもてしるすものなし尾陽
住人春流序阿を延宝五年刻す

徒然草大全　十三巻　高田宗賢

此書細川幽斎の筆記をもとゝして寿命院抄 野槌 貞徳の
慰草 盤斎抄 句解 諸家聞書 諺解 文段抄 鉄槌増補等を
引用してこれをあつめ上巻七冊下巻六冊合せて十三冊とす延
宝五年九月上木す

徒然草新注　四巻　清水春流

此書ハ此方の本文をしるして古来の諸抄にもとづかず書くの
文句をあげて自己一分の了簡をもつて注釈せり

徒然草参考　八巻　浄福寺恵空

此書ハ寿命院抄 野槌 鉄槌 慰草 長頭丸抄 金槌 古今抄
盤斎抄 句解 文段抄 鉄槌増補 諸家聞書 新注 諺解 提僻
大全等十餘家の諸注を作中より一説しるしてその中まあげてこれ
を略せる所をつゞりて和漢の故事を語の昔の物にかなへ
すべてもつまびらかにしるして参考八巻となせり洛外隠士陶
允が跋あり巻首に或問凡例あり此書の例としるして和語の解
ハかなにて傍にしるし漢字の引文ハかならず書にあらはすなり

徒然草直解　十巻　岡西惟中

一名清談抄といひて此本文の注ハ隠士を傍訓として記す巻首に
附諺凡例　巻末に此草紙の中にあらはる人々百九十八人の伝系図を
書中にあらはる名物の図をしるせり　貞享二年梅林老人福住

徒然草諸抄大成　二十巻　浅香山井

道誌の真字序およびに自序あり

寿命院抄 野槌 貞徳抄 盤斎抄 句解 諸家聞書 文段抄
諺解 慰草 古今抄 増補鉄槌 大全 参考 等の諸抄ハ此抄
さすが此書ハ傲游なりといへども大成したるものなし巻首に傳記系
図および越路が府浅香氏山井輯して此貞享五年上木す

徒然草首書 五巻

此書傍訓等ハしくしくにより毎巻目録まで附す洛東之本隠人
のなりと元禄四年然吾庵人の真字序にあり

徒然草集説 十五巻 隠者閑壽

此書ハ諸抄大成のなまへいひしてはやりく諸注を折中せんの題意
となりて参考の書ハ 寿命院抄 野槌 貞徳抄 慰草 古今抄
金槌抄 盤斎抄 句解 諸家聞書 文段抄 諺草 増補鉄槌
大全 参考 直解 吟和抄 首書 大成等也 元禄十四年刻

徒然草吟和抄 五巻

諸抄の意なほはしくしくはらせくばかりしたるもの 一名作言

草絵抄といへり作者つまびらかならず

寂寞草貫旨 五巻

かの此間に一言めの詞抄そへたりしハ注なくとも解しやすからし
めかくに片仮字もて評論をも附す作者つまびらかならず序跋にも
よずも共に名おしへたらず

徒然草の讃 八巻 東華坊支考

巻首に兼好の事跡園大暦第七巻より第七十二巻までの間に散在
するものをあつめしるし又一段ごとにはその味の讃し雑説を附しより
宝永八年上木す

徒然草奥儀抄 六巻 高屋近文

舊名徒然草明灯鈔といへり本文五巻に首巻一巻を附しく六巻と
す巻首に徒然草兼好が編する一部の書にあらず没後今川了俊
従しりいつめく編次せしと崑玉集園大暦等によりて併撰す○
近文曰ク一部の體儒釋道の納得了解しく文法ハ源氏物語法にか

納言が枕草子にかゞみとして兼好歌人のうちにをもふかし
ふかくたくみしものなれどもころ〳〵似たりといへるハ賞するにたらず
べし儒釋道を打まくハいふに値されけれどもくまりたる儒の掟にたが
へるもの八ヶ條ありまた釋教もまた小乗劣機の法にして凡慮なるもの
なり老荘のことはし書きなしぬれど彼書のおもむきハ和語と以
てあつせのし渠が文盲をそへて句讀もおぼつかなしこれおぼゆれバ
すべて儒門よりいへバ且神祇祠官の家に生れながら神道に於ても九
牛の一毛もそなはらずこのうへにハいたしがたきなれども廣く人にもてはやさる
あたへ先人の注解と蒙るハ不相應なれ大かた面白しらざる明達
の人は鈔せすべき書ともいひがたしもてやすべくハ後人の好事も其笑
をうけし異端語言妄語もあながちに遊戯ともいひがたきなれどもさる
ものあり仰にいふほどに古語本書なども用ひかたハ凡庸の
小補ともなるべき條ハ此あたりいひしもの一二〇又徹齋夜話ハ
孫すら看のそのうけをすべて兼好と雖ずと衛し〇此書上をあすし

このれ如く兼好ねらりしてかぎりし一部の趣意をば假りしよりてとのこと〇
漢字の自序を或問觿言明汀以て訳之の語によりて明汀稿の名義
此によりよりて正徳六年三月墨江祝部田中光世の假字序同年
四月海南雲山人漢字の跋あり

徒然草片玉秘事　一巻

發端の傳　説心の傳　三箇大事　兼好遺淚　芳野拾遺　兼好遺識
岩玉集　兼好卒所　園太暦　これしるし右のほかにより奥書にこと右徒然之草
片玉秘事ハ徒然奥儀抄の附録にして平住專菴先生家藏の本
なりしを享保二年に上木す

徒然要草　七巻　一獻求上人

此書ハ一段ごとに注解あれば佛旨祖意に関る〻儒者の如く
掲て段々序文に見えたりこれハ此書の中の文句を
誠に用ひてるのうて兼好の趣意を失ふ事ありなどいふのある
べし大明とありて大中條明音の序あり

御伽草子　二十三巻

一名御伽文庫といへり中古の草子なり作者しれず撰者つまびらかならず

第一　文正草子　第二　鉢かづき　第三　小町草子
第四　御曹子島わたり　第五　唐糸草子　第六　木幡ぎつね
第七　七草草子　第八　猿源氏草子　第九　物くさ太郎
第十　さゞれいし　第十一　蛤の草子　第十二　小敦盛
第十三　二十四孝　第十四　梵天国　第十五　のせさる草子
第十六　猫の草子　第十七　浜出草子　第十八　和泉式部
第十九　一寸法師　第二十　さいき　第二十一　浦島太郎
第二十二　酒顛童子　第二十三　横笛草子

以上二十三帖也○此中第十六巻ねこの草子は天下おだやかに天下安穏しあがつて御代をいはひ人々公方をおそれずてんがうちとくることさらにゑらばれし御代のかしこきに竟舞の御代をすゝむ

まつりごとありけるにや七年八月中旬より洛中にわかに風流し
きそくをれちたまふべき御さたありしより〇按ずるに此二十三帖のうち
文正さうしばかりはいにしへの人のつくれるにや古代のさましかへらず此猫のさうしなどはうち
きこえのかぎりは慶長の頃に号そありしより此すゑのことなるにや
ちかき頃なるべし流布するもの枚挙にいとまあらず

舞の本　三十六巻

中古舞の譜なりさくしやしれず古雅なる文句多く
おもしろきものなり此書は中昔の作なれども猶古きを存せり
多田義経が三十箇條故實辨に此舞の本の詞の解しがたきことの
おほく見えたり○按ずるに兼好が徒然草にいはく多久助
が申けるは通憲入道舞の手の中に興あることゞもをえらびて磯
の禅師といひける女に教へて舞せけり白き水干にさうまきを
さゝせ烏帽子を引入たりければ男舞とぞいひける禅師がむすめ
静といひける此藝を継げり是れ白拍子の根元なり佛神の本縁を

もの又其は源光行おほくのまをつくられたる謡曲の作ものにて舞
ことしさせなるひれいとなきこれ故にく考へえて古き翁の
書にゆうりかやんこれらなきんへの作ものよじめてるやら今世三十
六番の目録は左のごとくすくなし

資いて　いろはかしま　常磐問答　いろいの
夢たらせ　新曲　剱讃嘆　かうすの與一
おしごん　四國落　元服曾我　小袖曾我
和田さかもり　とがし　清しげ　未来記
木曽願書　しげ清上下　馬ぞろへ　笛のまき
いぶき　十番切　大職冠上下　伏見ときハ
堀川夜討　あつもり　まんぢう　高だち上下
夜討そが　ゆりわか大臣　文学　笈さがし
志田　つきしま　烏帽子折上下　八島
以上三十六番の舞なり

もとめ草　写本　四巻　建涼岱
涼岱諸國旅行せられし見聞のまゝをしるし其余人々よりのがたりきゝしことのなかより興あるあやしき事の感あることもしるし又四季をりをりにつけて雅語をもちいまつぶさにしるしたるなり

すゞみ草　一巻　同上
此書ハ作者の夏の比の暑さに耐かねてある日の夕暮に遊歴せしをりよりかくしるしたるなり秋のはじめ其日のけしきのおもしろきことどもをしるしたるなりさらに奥ハ秋よりの事なりしかくのごとくしてこのおもむきなりしるしたるまで附録ハ和文なるたよりよき総のことばの類なるあつめたるなり寛政六年十二月上木す伴蒿蹊の序あり

日記類

紫式部日記 写本 二巻 紫式部

此日記ハ紫式部夫左衛門佐宣孝にをくれしのちも宮仕の比の他につかえ
えて上東門院の御存のすぐれ御堂関白道長公のけいせうし
とほどよくもてなしそのおりのことの跡などのこるならず紀の局と云
名かりしるすなれも此日記にみえたり写本は契沖の校本なりとし
かく朱にてかへハ墨をもつて文字仮名など誤をかながへせられり○此日記扶
桑拾葉にも収めさせ給ひて又安藤為章此日記をよく源氏物語
一部の奥意ならびに式部の才徳を賞せしる紫女七論といへる
あり

紫式部日記傍註 二巻 壺井義知

なる此ものは真字仮名あやまりしを此義知さらに正しやすからしめ
且考證のすじも加へられもちせり巻首に式部の系図を載し

巻末に日蔭のかつらの図をのせたり

蜻蛉日記　八巻　右大将道綱母

道綱の母は正四位下苻系倫寧の女にして東三條攝政兼家公の室なりはじめ天暦八年の比兼家公の右兵衛佐なりし時此倫寧のむすめにかよひそめたまひてよりはしめて此贈答ありしが後に兼家公の室となられしまゝ身の此八月に道綱は誕生ありしよりの事どもをかきしるしたるなり此日記は八の天暦八年に兼家公のよびたまひしほどより道綱は誕生の事をのせたり道綱童殿上の事天禄元年にえ候の事天延二年まで廿年のほどの事どもしるされたり時は天禄元年より歳ありて元服の事なりしとかなりとぞいへりさてこの日記上巻のすゑにあるをもとにかつらのことの日記といふものありこの記上巻のまゝにおもふれきなるにやりつれたりと流布の本上中下巻あるなかの一巻の上下にわかちて八冊とすれどもこれは天暦八年よりはじまるものなれば天延二年よ

まで廿一箇年の間の日記なり○此日記刊本写本ともに衍字のおほくありて脱文衍字など考へしることかたし契沖の校本はよけれどもうしなひてつたはらずしかれども校正のよき本のなほあれば善本をもとめて重校すべし

かげろふ日記解環　二十七巻　十八本　坂徴仲文甫

自序にかげろふ日記の本文を写本とてもふるき本ども見あはせてよみがたき字のはぶきたるをかきそへしことなどしるせり契沖の校本ども見あはせて此書あらはれたり萬葉その餘の歌集ともに注釈せられたるはおほかれどもかゝる日記のたぐひはつたはらずおぼろげにさとりがたき事どもおほかるをそのかみの人のことばをもつてさとしたるはたぐひなきものなりまたむかしのことばどもとりあつめて契沖の校本とおなじ聖の釈によりしめくくりもとりて本書のことをもくはしくしるせり契沖の校本乃ち水府の侍者にてうつされたるを善本とせられたりてよくかへば

く譌あることなきにしもあらず假名かもちふるぞいしたる手がき詞ぞうのかく
ようきもれにあつかあがらざまりめくうしとしやまなからんより
外の術なかりしんの齋治がしてもしかぬ連環ありしてしれありしいか
めぐりさ年推もてしかんきへなひしゝ碎く〇そしてれんやう
かし奥沖の校せられしてこころそ弄しくひましのかたこふ
なくはやむしかねず臆説かもてあのあやうかもぶし人
のんかまとまりてともて解環しむいもの〇凡例　上下　凱平氏辯
道綱ハ寶ぇ兼家公次男たるべきの辯　奥沖校本のり　みな轉
訛のり　かなづかひのり　此抄は見られまく釋するり　此書日記ぐん
ごろり　大鏡　栄花物語等符合す　女君の稱号諸書に異同を
ろす　道綱ノ位署のり　女君の詠歌勅撰に入る　以上凡例上　料簡
原遇漢文　年立　源氏物語の年立にならひて道綱の成長ハ女君の主旨に行ふ
よろしく仮の年齢をおいでゝえ　補遺　なきは秋のしらせしりみ九条らしく記す
以上凡例下　〇なるは中あしく年号おもてして道綱の年齢を附するの

年号ハ天暦　天徳　應和　康保　安和　天禄　天延等なり　〇此日
記下巻此末に　年乃きてかのも夜のふうもいとしいかな此ね
此日記の大尾なりり奥沖のいはく以下ハ按人のつぎて書くものしらくハ
て此おもハ附録としく巻末なるなり〇巻首に阿波今城世阁漢文
の序ありり次しれの自序ともえの五年正月しるす

辨内侍日記　写本　二巻　辨内侍

一本に後深草院弁内侍家集ともあり　上巻ハ後嵯峨院の寛元四
年正月廿九日しみの御讓位のりより書そじめ同
五年より宝治二年同年建長と改元あり九月まくのよを
ろせり　下巻ハ同年十一月より同二年同四年十月までのるす
とてかり下巻の末に錯簡多くして脱文あり〇奥書にいく此集
後深草院ノ辨内侍歌多ク見エ之仍号テ彼ノ集ト此ノ辨内侍者前院参
議公ノ男中納言長良卿之末葉中務大輔信實ノ息女也

讃岐典侍日記　写本　二巻　讃岐典侍

上巻　堀河院御脳より崩御のをりまで　下巻　高倉院御即位
大嘗会まであり　巻末に脱文あり○上巻奥書云右本拝借仙洞
御本こゝに書写之与清閑寺亜相具房卿令校了云々寛永廿
六稔念二　秘書郎　下巻奥書云　右申請官本一挍畢源極臈倭
洛津書写之与石倉中将一挍了　寛永十六稔臘十六　秘書郎

方丈記　一巻　鴨長明

長明北山に閑居せし所はおほはらにて侍しところなりしかれどもあ
りしよりまざかなしことをあつめしるせし○安元三年四月
廿七日の大火　治承四年四月廿九日の大風　同年六月遷都　養和の
比の飢饉　元暦二年の大地震のことどもをつぶさにのせり○方
丈の記と名づけしは巻末に大原山のおくにて世をいとへる家
のありさまをつゞりしも似ずひろさハ七尺みたち方丈をさハ七尺
ところかまへりいまあさゆふつまびらかにしたつらね土居を
もちゐけるはまへつまどひらきはしけりしんくなまれ
きぬこゝにうしをやすく外よりみえんかなあかりをれ行しるあつ
むかしはいとぞこれまでしひつけつむしろはかりなる二輌かろくるま
此ちかし所むかしつけはしるに又に他の用途いらずとぞ

方丈記諺解　二巻

作者つまびらかならずとかしずはりさきのことせりてハかみれならつきあ
ありて元禄七年刊行す

方丈記頭書　一巻　山岡元隣

本文に趣意を諸書抄川くからして注せり少々補注

方丈記泗説　二巻　加藤盤斎

巻首に題号をかしじらに作者のことをいひ本文の注はおほくして有
図説にしをせり巻末の方に長明の伝をしるす　明暦四年
正月刊行す

方丈記流水抄　二巻一本　槇島昭武

巻首に標題をとく　長明の履歴　方丈のほか長明著述の書真偽

のす系図等をあげられたるに此後ハ改めてしるせり ○此記流布
の本ハ六の巻ハ巻末に缺たり
月けハ入られたるもつらぬきたるたぐひなきをしるせりとかく
昭武ハ後ニ此歌新勅撰釈教の部に十二光仏の心をよみ侍り
けるに不断光仏をよめり 源季広ハ長明同時の人にして
みる事およびて先むかしのことをしるせり ○此書宝永三年春駒谷散人
槙島昭武著しるせり流水抄となづけたり八千代の発端の詞に
よりてかくなづけたるなりし 享保四年八月刊行す

冨士御覧記 写本 一巻
普光院義教公冨士山御遊覧の為駿河の国におもむかせたまへることを依
拳の人々の詠歌などもしるせり此書一本釈正広の序有るよし此志
らぬのよしに記せり

柴屋軒宗長記 写本 一巻 釈宗長
大永二年五月宗長北地旅行のより同七年蔡の兄翫思庵にいたり

同四年同じく翫思庵よりいたり同五年摂津にいたり同六年駿河にまた
今年三月までの日記し其中に紀行および連歌発句を懐紙に 道風院文
のす 老のすさひにかきつけたり

宗長九十記 写本 一巻 同上
大永六年正月より同七年十二月までの記し今年宗長八十歳
なり ○此記をかきし事ハ年号すぐして八十一歳の時なし 御たかむる
わかめでし

和文類

扶桑拾葉集　三十巻　三十五本

西山公御撰　古今の和文三百十三篇を載させたまへり　扶桑拾葉集と題して　後西院の勅題なり　巻首に兵部卿幸仁親王の序あり　又　西山公此書を　太上天皇に進めたまへる表あり　別に系図一巻を著はして　作者の家系をしるさせたまへり

巻第一

古萬葉集序　嵯峨天皇

後拾遺和歌集序　藤原通俊

新古今和歌集序　藤原良経

續古今和歌集序　藤原基家

新葉和歌集序　宗良親王

古今和歌集序　紀貫之

千載和歌集序　藤原俊成

新勅撰和歌集序　藤原定家

風雅和歌集序　花園天皇

新後拾遺和歌集序　藤原良基

新續古今和歌集序　藤原兼良
巻第二
家の集の内　同
土佐日記　紀貫之
大井川行幸和歌序　同
巻第三
遠江道記　同
庚申夜奉和歌序　源順
又　同
天祿歌合序　源為憲
行幸高陽院應制和歌序　善滋為政
又　同
枕草紙跋　清少納言
巻第四

亭子院歌合日記　伊勢
家の集の内　檜垣嫗
蟻通の神よめる和歌序　同
熊野紀行　釋増基
子日行幸和歌序　平兼盛
家の集乃内　曾根好忠
又　同
同跋　同
家の集の内　加茂保憲女
應詔和歌序　橘正通
紫式部日記　紫式部

巻第五
巻第六
家集の序　大中臣輔親
さらしなの記　菅原孝標女
巻第七
九月十三夜於前武衛泉亭詠和歌序　同
悦目抄序　藤原基俊
大かゞみ序　藤原為業
奥儀抄序　藤原清輔
撰集抄序　釋西行
巻第八
高倉天皇升遐の記　同
巻第九
同後序　同

和泉式部日記　和泉式部
家の集の内　相模
家集の内　藤原定家
[illegible]は松送序　源頼信
[illegible]序　源俊頼
一子傳序　同
後葉和歌集序　藤原為經
水かゞみ序　藤原忠親
疑家の[illegible]文　同
厳島御幸の道の記　源通親
古来風躰抄序　藤原俊成
正治奏状　同

御裳濯川歌合序 同
日吉七社歌合序 同
住吉歌合跋 同
家の集乃内 左京大夫
艶詞 同
巻第十
蒙求和歌序 源光行
俊成九十賀記 源家長
賀茂大明神にたてまつる百首和歌序 同
奉納聖霊院和歌序 同
早卒露膽百首跋 同
色葉和歌集序 同
土御門天皇に奏する文 藤原家隆
発心集序 鴨長明
五社百首序 同
同跋 同
民部卿家歌合跋 同
安元御賀の記 藤原隆房
和歌色葉集序 釈顕昭
百詠和歌序 同
愚管抄序 釈慈円
老若和歌序 同
少納言基長城将る辞 同
百首和歌跋 同
権中納言定家にて贈る文 同
拾玉集序 同

方丈記 同
巻第十一
遠島御歌合序 同
おきよりの御文 同
宮河歌合跋 同
長綱百首の端によりてせる辞 同
人にかはりて消息せる文 越部禅尼
斧柯序 源通光
弘長歌合序 藤原為家
古今著聞集跋 橘成季
巻第十二
庭のをしへ 或曰乳母文 同
十六夜の記 同
野もりのかゞみ序 源有房
千五百番歌合勅判序 後鳥羽天皇
新古今和歌集跋 同
顕注密勘跋 同
家隆につかはす文 同
和歌初心抄序 同
東関紀行 源親行
七十番歌合跋 藤原光俊
宝治歌合跋 同
うたゝね 阿佛
権大納言為家の五七日の願文 同
隣女集序 藤原雅有
源氏論義序 源具氏

同跋　同
巻第十三
石清水御願書　後光嚴天皇
御すなはち古今集跋　同
李花集乃うち　宗良親王
又　同
又　同
千首和歌序　同
巻第十四上
ふじ代かりの日記　同
筑波問答序　同
巻第十四下
雲井御法　同
都のつと跋　同

中務内侍日記　中務
賀茂社御願書　同
名和長年にたまふ勅書　後醍醐天皇
又　同
又　同
又　同
住吉まうで　源義詮
年中行事歌合序　藤原良基
嵯峨野物語序　同
小島のくちずさみ　同
榊葉日記　同
愚問賢註序　同
雲井の花　同

白鷹記　同
人はとふ句　同
巻第十五
高野日記　同
都のつと　釈宗久
落書露顕序　同
道ゆきぶり　同
巻第十六
伊勢太神宮参詣記　坂士佛
巻第十七
北山行幸記　同
巻第十八
仙源抄跋　同
もくされ稚の序　同

さよのねざめ　同
筑波集序　同
愚問賢註跋　釈頓阿
髑髏の絵の讃　釈慶運
言塵集序　藤原貞世
鹿苑院准后義満公厳島詣記　同
河海抄序　藤原善成
源氏物語提要序　藤原範以
相国寺塔供養記　右京経嗣
七百番歌合序　同
両聖記　右京長親
鹿苑院准后義満公松嫁　右京雅縁

後小松天皇升遐の記 ロ
巻第十九
巻第二十
春宮に賜りせ給ふ御文 後花園院
世鏡抄跋 源義政
文明歌合序 ロ
三源一覧序 藤原俊通
魚山の作法 覚胤法親王
巻第二十一
文安詩歌合序 ロ
年號の序 ロ
南都百首序 ロ
草根集序 ロ
歌林良材集序 ロ

冨士ノ記行 尭孝
椿葉ノ記 後崇光院
冨士ノ記行 藤原雅世
山ぐ川の記 貞常親王
和歌入学序 藤原雅親
慈照院准后義政公自歌合跋 ロ
五月雨記序 邦高親王
嘉吉三年歌合序 藤原兼良
雲井の春 ロ
花鳥餘情序 ロ
藤川の記 ロ
古今童蒙抄序 ロ
つくしみちの記序 ロ

勧修念佛記序 ロ
竹林抄序 ロ
巻第二十二
法のむしろ ロ
山のかすみ 藤原雅康
巻第二十三
蒼亜槐実隆か詠月和歌序 ロ
その草の記跋 ロ
ますかゞみ序 藤原冬良
夢菴ノ記 釈肖柏
雪の夜宝寺にて捉の辞 多々良義興
巻第二十四
詠月和歌序 ロ
細川右京大夫自歌合跋 ロ

仙洞歌合ノ跋 ロ
世諺問答序 ロ
なぐさめ草 釈正徹
寄花述懐和哥序 ロ
関東海道記 ロ
ちかごろの日記 藤原基綱
蒼亜槐実隆か慰予失妻和歌序 ロ
世鏡抄ノ序 藤原公方
新百人一首ノ跋 釈道真
三愛ノ記 ロ
雲井ノ御法ノ跋 ロ
勅よまげ發句ならする記 藤原実隆
為堅法師自哥合跋 ロ
中原遠忠自歌合ノ跋 ロ

慰参議基綱卿失妻餘哀和歌序
きあうき日記跋 ロ
住吉ノ記行 ロ
巻第二十五
世諺問答跋 右丞兼冬
七十賀和歌序 ロ
高野山参詣記 ロ
武蔵野記行 平氏康
巻第二十六
妻ありてよめる和歌序 ロ
百首和歌序 ロ
清見の記 ロ
長源院をいためる辞 ロ
雅春卿をいためる辞 教道法

名香合ノ跋 ロ
菴資直卿和哥ノ序 ロ
快祐法印七回忌和哥序 右丞公夏
秘抄ノ序 右丞公條
三塔順礼記 ロ
石山月見ノ記 ロ
永禄歌合ノ跋 右丞資定
桂林集ノ序 右丞実枝
心珠詠藻序 ロ
称名院右府七十ノ賀記 右丞植通
嵯峨ノ記 ロ
昌叱といへる和歌ノ序 ロ

光源院贈左府追善三十一字和歌序 教実位
からさき八松の記 尊朝法親王
闕疑抄ノ跋 ロ
巻第二十七
かしまもうで ロ
贈太政大臣信長公ヲ悼ム辞 ロ
太陽院をいためる辞 ロ
かやぐさ 右丞前
代賀豊州挽辞 ロ
又 ロ
陽光院三十三回忌追善の辞 興意法親王
後陽成天皇升遐の記 平時康
巻第二十八
後陽成天皇を悼む辞 ロ

九州道の記 源藤孝
夢想ノ記 ロ
岷江入楚序 源通勝
贈左大臣義晴公を悼む辞 右丞尚久
准后道澄法親王を悼む和歌序 右丞信尹
右京元信をいためる辞 ロ
夕顔巷辞 ロ
与賀古宗隆辞 ロ
恕仙法印を悼む辞 ロ
式部卿智仁親王を悼む和歌序 好仁親王
日光山ノ記行 右丞光広
道の記 ロ

春の曙 ロ
式部卿智仁親王の悼ある和歌序 ロ
三島明神法華経を納むる和歌序 ロ
萬里江山石の記 ロ
目さまし草跋 ロ
[illegible]天皇四百年御忌御廟参詣記 右京氏成
後陽成天皇の悼ませる辞 ロ
同 右京実承
巻第二十九上
朝ぼらけ ロ
さかご河も ロ
大井川逍遥記 ロ
巻第二十九中
吾妻の道の記 ロ

花見の記 ロ
医師浄瑠璃いたむの辞 ロ
浅間の記 ロ
あづま紀行跋 ロ
百椿図序 ロ
式部卿親王の悼る和歌序 良恕法親王
東山々家記 豊臣勝俊
西山々家記 ロ
春の山ぶみ ロ
九州の路の記 ロ
はじめてあづまにまかりける道の記 ロ
叡山にまうでし辞 ロ

花山のちりしを ロ
妙寿院に法をとす句 ロ
松平越中守にをくる句 ロ
道春法印におくる句 ロ
妙寿院餞別 ロ
永喜法印餞別 ロ
巻第二十九下
道春餞別 ロ
祖母の七十にあたりける時の句 ロ
玄旨法師をいためる辞 ロ
林叔勝におくる辞 ロ
そこのまさご ロ
なるはのこと ロ
巻第三十

ぬすまく来る捧る辞 ロ
稲葉内匠に送くる句 ロ
那波道円におくる句 ロ
佐川田の何かしにおくる句 ロ
春日の御つかへの餞別 ロ
正意法橋餞別 ロ
後陽成院崩御を悼み奉る句 ロ
妙寿院におくる辞 ロ
稲葉丹後守におくる辞 ロ
うかの松 ロ
きぬかりし衣 ロ
辞世 ロ
女におくる辞 右京幸家

肥はかれゆいてあり辞　右京乃亮
於長嘯亭催花宴和歌序　〃
報源光一詩歌序　〃
九月十三夜和歌序　〃
仙洞御色紙記　〃
嵯峨遊覧記　〃
関東海道記　〃
友なりとめし和歌序　〃

扶桑拾葉別集　写本
何人の撰かるとはしらず　三巻
亡友江田世恭か為し

上巻
圓融院扇合
長元八年殿上歌合記　作者不知
最勝四天王院名所障子和歌

惺窩文集序　〃
奉納菅廟詩歌序　〃
又
日光山法華八講記　〃
八瀬詞　〃
成元餞別記　〃
前の相公悼る和歌序　〃
宇治興聖禅寺記　〃
東三條院撫子合
珍誉集跋
風葉集序

新濱木綿和歌集序
舞御覧記
陽禄門院卅三回忌記
水無瀬殿哥合跋
等持院八講記
北山院御入内記

中巻
大嘗會記
春日社参記
めしよりぬ物語
よしの河の紀行
新撰筑波集序
續五明題和歌集序
枕草紙跋
艶詞

下巻
十訓抄序　菅原為長
紫明抄序　素寂法師
奥州後三年記序　法印玄恵
同跋　〃
釋門三十六人歌仙序　僧宗海
秋風抄序　小野春雄
かなつかひ序　行阿法師
新自讃哥序　頓阿法師
連珠合璧集序　梵灯庵
善光寺紀行　法印堯恵

北國ノ紀行　ロ
芝草　同序　心敬作れ
奉納住吉連歌序　ロ
連歌比校集序　ロ
和希菴禅師の次韻和歌序　西三条内大臣
毛利元就家集ノ序

海道ノ記
種玉篇次抄ノ序　宗祇法師
わくらはの記ノ序　法橋兼載
多々良政弘にあたふる和歌序　ロ

拾遺後葉集　写本　二十四巻　二十六本　江田世恭撰

目録一巻を附す巻首に漢字の題言あり扶桑拾葉集の続集に擬して撰ひ○題言なく此編をわかちて別行草録の二科として菊合　扇合　撫子合　讃岐典侍日記　辨内侍日記　後醍醐帝年中日中行事　尭恵　正廣　宗牧　宗長記行手記記等あり文長短同しからすといへとも皆係せ收めて遺すことなしこれすなはち拾葉集の孝標女日記　紫　和泉　中務内侍日記おほく採録の例なり又其文享保以来八つの十の二三其餘ハこれ近代延宝より上延喜にいたるまで七八百年の間なり

巻第一　別行
寛平菊合
東三条院撫子合
鷹司称念院殿春秋抄
圓融院扇合
天徳歌合仮名記
道範阿闍梨南海流浪記

巻第二
讃岐典侍日記　上下

巻第三　上
辨内侍日記　上

巻第三　下
辨内侍日記　下

巻第四
後醍醐帝仮名年中行事
同日中行事

巻第五
元徳行幸ノ記
後普光園院永和大嘗会記
寛正五年御遊の記　雅親ノ
寛治二年ノ歌合　ある

巻第六
堯恵東海道記
巻第七
東素純筆のすさひ
巻第八
巻第九
同老のひうぶゝ
巻第十
同手記
巻第十一
清少納言松島日記
宗長宗祇終焉記
巻第十二
小堀遠州侯東海道記

北野梵灯菴主問答　秋忍書
明空撰要目録
姉小路基綱卿若草
日比正廣日記
宗牧東國紀行
宗長九〻記
宗長流紫記
獺書　定家卿
澤菴和尚鎌倉紀行
紹巴富士紀行

巻第十三
巻第十四
實條公関東下向記
巻第十五
同諏訪山家友記
實業卿高雄記
同嵯峨記
巻第十六　単録上
大中臣能宣家集自序
顕季卿俊頼朝臣贈答文
通方卿續古事談跋　作者可考
御裳濯川集序
源氏物語供養表白
素寂紫明抄序

元政上人身延道記　上下
似雲奥州紀行　上下
宋雅越前下向記
雅章卿芳野記
實種卿御庭拝見記
為村卿柿本影供記
壬生忠岑大井川行幸序
頼朝卿与範頼文
清輔朝臣尚歯會記
家長朝臣新古今跋
風葉集序
鷹司圓光院殿續後撰上帖序　作者可考
玄玉抄序

如大尼假名法語
頓阿十楽菴記　同上
摘葉集跋
薫物方書序　作者可考
源氏千鳥抄跋
救済連歌抄跋
揚鴫暁筆序
景房多宝塔建立勧進状
巻第十七　単録中
逍遥院前内府為妙華寺殿下歌序
同八景和歌序
宗祇百人一首抄跋
同悼宗椿歌序
逍遥院殿源氏系図跋

送琊憶上人序
仁和寺競馬記　作者可考
茂範卿唐鏡序
職人画歌合序
心敬僧都連歌抄跋
栄海僧正釈門歌仙序
住吉社司夢想註進状
新筑波集序
下冷泉持為卿百首跋
夢菴長匠百首跋
称名院右府為冷泉黄門歌序
宗鑑老の春

宗祇自賛歌註跋
大江元就集跋
道澄准后島津入道百首跋
遊行他阿上人弄花抄跋
道晃法親王家集の内
同里亭当座序
長松軒惟翁千年山八境記
後十輪院前内府御製十三首跋
巻第十八　単録下
風早公長卿名香記
実業卿与青木永弘歌序
烏丸光雄卿塩竈香炉記
渓雲院前内府硯銘
同長柄橋柱文台記

義尚公多田院奉納和歌序
東求院殿下近江八景歌序
信長公賜布施藤九郎書
後西院御製鳳足硯記
烏丸資慶卿泉涌寺御法事記
西山公贈朴翁辞
道晃法親王女院御色紙跋
清水谷実業卿牡丹花序
有栖川幸仁親王贈永弘歌序
公長卿同
日野弘資卿硯銘
同橋立香炉記
同芦田鶴笛記

同瀧浪篳篥記
東久世博高卿同
重季卿高雄山記
風早實積卿同
同千歳藤記
同夏衣和香木記
同与津田氏女辞
同弘川古墳種花記
柳原光綱卿含雪盆石記
同卜種香箱銘
同遊八瀬里記
同与小出信濃守詞
不昧心院前内府東行記
光栄公宗祇水記

冷泉為綱卿織物手鑑序
中院前右府曽根松記
油小路隆貞卿清和院僧正八十賀歌序
同長柄橋柱文台記
同布留鳥居硯箱記
同葛城百首跋
同似雲窓の曙跋
石山師香卿茶杓記
実陰公雪嶺盆山記
同修学寺行幸記
同興福寺再建勧化疏
良恕法親王いせの道きく
木葉集跋　作者未知
同碧梧亭記

同示松井生辞
同長柄橋柱硯蓋記
九条殿下白峯奉納歌序
巻第十九　補選
晩華集序　僧契沖
住吉社に奉納の奥書　同
柿本の神詠よくふてすわ　同
八月十五夜名不月和歌序　同
壬子試筆の詞　室直清
巻第二十
よしの花のえん　昭乗
橙子香合記　日野弘資
もろみ早ませ　同
巻第二十一

同西蓮追善歌序
烏丸光胤卿贈宇佐大宮司歌序
同月輪殿追善般若心経跋
暮露々々草紙　作者不知
林葉累塵集序　下河辺長流
桜をちらしてよしの歌の序　同
楠正成が伝賛　同
野田藤の記　同
東武再往日記　荷井淑斎
閑谷集序　作者不知
東紀行　城正章
賀六十和歌序　今井似閑
四十賀記　同
関東下向記　小堀政一

丙辰紀行 林道春

巻第二十二

奉納百首跋 同

漫吟集序 下河辺長流

得掲後摘時謝本主詞 同

詠紅葉文松和歌序 同

人丸開眼於人の[illegible]詞 同

賀婚姻詞 同

恵心僧都図画記 同

代近記序 同

時困の歌 成島信遍

三宅良親興行和歌序 同

奉祇園社百首跋 同

盆石記 同

答冨島利貞翁羽文 伊藤長胤

萬水一露序 松永貞徳

奉悼妙法院辞 僧契冲

詠慶賀百廿首序 同

贈浅小井氏詞 同

詠昇仙石和歌并序 同

弔喪立国子詞 同

源註拾遺序 同

餘材抄序 同

詠廿日月和歌并序 今月長孝

与念悦法師詞 同

退居久安寺詞 平間長雅

弔母喪詞 同

住吉奉納千首和歌序 有賀長伯

川井法橋夢想啓和歌序 羽間宗玄

賀雨山氏六十詞 同

翁の文序 川井立敗

桂山集自序 同

巻第二十三

春のくさ 成島信遍

四国雑記序 法係杜多

東の紀行 同

假名文字書様大意序 渡辺素平

東野州聞書序例 作者不知

光源氏一部歌詞序 同

假名句題和歌抄序例 晩翁

風塵記 上中下 平間長雅

夕日山記 同

岡西五十回追福和歌序 同

玉津島紀行 川井立節

懐元亮和歌并序 同

高野山紀行 烏丸資慶卿

書ねよろつ條 奥野保悟

告天満宮文 西山宗因

有馬両吟五百句序 西順

追悼百韻序 岡西惟中

一字御抄序 同

愚問賢注六窓抄跋 同

百人一首改観抄序 樋口宗武

新古今和歌集増抄跋 加藤盤斎

巻第二十四
日光山供奉私記 上下 源和興　父子相迎 上下 向阿上人
自讃歌序 同上　宇治の川瀬 作者不知
又　家集の内 津守国基
奉悼玄旨法印文 松永貞徳　後撰光国称説よりする文 頓阿法師
〇按ずるに此巻の末の宇治の川瀬の一篇は続世継第四巻の
文なり刪べし

文乃栞 七巻 八本
撰者の名知れず。そのはしがきに新発意西阿弥陀仏序とありて巻末に
寛永丁酉十二月藤原忠胤漢字の跋あり。扶桑拾葉集の
中其余の文章数篇をのせて文体をわかちぬ
巻之一上 歌集序
古今和歌集序 紀貫之　後拾遺和歌集序 藤原通俊
新古今和歌集序 藤原良経

巻之一下
続古今和歌集序 藤原基家　新勅撰和歌集序 藤原定家
庚申夜奉和和歌序 源順　大堰川行幸和歌序 紀貫之
九月十三夜前武衛泉亭和歌序 同　子日行幸和歌序 平兼盛
風葉和歌集序　天禄歌合序 源為憲
御裳濯川歌合序 藤原俊成　遠島御歌合序 後鳥羽院
巻之二 物語序
大鏡序 藤原為業　水鏡序 藤原忠親
増鏡序 藤原冬良　愚管抄序 釈慈円
十訓抄序
巻之三 歌話序
奥儀抄序　悦目抄序 藤原基俊
筑波問答序 藤原良基　筑波集序 同
和歌色葉集序 釈頓阿　殿上根合序

巻之四　記類
亭子院歌合記　伊勢
宗祇終焉記　宗長
巻之五　記行
熊野詣記行　釈増基
泊瀬記行　[illegible]
石山記行　同
巻之六　跋類
枕草紙跋　清少納言
宝物集跋　平康頼
宗久旅日記跋　藤原良基
巻之七　雑文
奉蟻通神和哥序　紀貫之
贈京極黄門卿文　釈西行

俊成九十賀記　源家長
尾張記行　[illegible]
辛崎記行　同
高野記行　[illegible]
百首和歌跋　釈慈円
古来風体抄跋　藤原俊成
乳母の文　阿仏尼
盗跖木辞　[illegible]

筑前中納言秀秋餞別　同　　[illegible]　同
辞世　同　　骸骨絵賛　[illegible]
已上四十六篇　寛永七年正月刻

歌文要語　一巻　建涼岱
天地　季候　人　衣食　家居　器　急　旅　生類　草木
神仏此の類はもちら和文にかきならふるうへにみゆるものをすまし
そのことばのひふゆへ古事記　日本紀　延喜式　古語拾遺　萬
葉　催馬楽　土佐日記　古今集　其餘物語類より採出して各
其書名をあらはせり　明和二年十二月刻

てしかきぶり　一巻　同上
八代集のうちよみ人しらずの哥四百余首をとりてそのせうし
はじめより長きうたもよみえらびて其のことばをあつめ例をしめす

後編　てしかきぶり　一巻　同上
よみ人しらずのことをとりあつめたり

これは漢僕からげしるの作文にして　君にまうす詞　又母にまうす詞
身へいふ詞　子にいふ詞　友どちにいふ詞　佛にまうす詞
其ほか何かと筆紙をもちてかける　越の花乃夜はみ
序　口繪　後跋あり　安永二年正月刻

國文世々の跡　再考　三巻　蒿蹊伴資芳
巻首に題言十條あり　古代の例　中古代の例　近代の例とわけ
ちとりし其時代の文をわけて論ぜり　又國語書讀の例を立
て住吉物語源氏物語などのふみの文もあげ末に譯文の例と
併せたり　安永三年東縁信の跋あり　同六年刻

譯文童諭　二巻　同上
もじ見よ華実の辨あり　次に俗言雅言の差異　雅文俗
文に何す條　俗文を雅文に譯す條　漢文を國文に何す條
およの傳あり　又向阿上人の三部のかなふみの作れたを和文になしてや
すく譯せしを附録にし　荷田春満のふみにかけし落藤(?)
賦に擬せるにかしきをもあげく初学のためにしるし論せり
寛政五年　如上人真字の序　上田秋成かなの序あり

紀行類

土佐日記　一巻　紀貫之

貫之土佐守ありしく延長八年より彼国に下り至六年のは承平五年に任はてゝ京へ帰る時の紀行なり此文はいときよらかにみやびやかにて女のかきつる日記のやうにかきなせる也伝ふ侍る季吟のおもふ土佐日記一巻ありて善本なり但京極黄門の蓮華王院の宝蔵にありしをうつしよりの抄にしるしおきける其奥にかくつけられし文暦二年乙未五月十三日乙巳老病中雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆之本 蓮華王院宝蔵本料紙白紙不打無堺 高一尺一寸三分計廣一尺七寸二分計紙也 廿六枚無軸 表紙続白紙一枚 端聊折返不立竹無紐 有外題土佐日記 貫之筆 其書様和哥非別行定行書之聊有闕字哥下無闕字而書後詞不堪感興自書写之昨今二ケ日終功 桑門明静 くく 明静ハ定家の法名

なり○或ハ此本乃ち老人雑記にしるせし自筆の土佐日記ハ蓮
華王院の什物なりし也定家卿の写されしに書写の本のえ的證
所にあり今ハ加賀の家蔵となれり定家卿の写して自己の筆力にて
写一本ニとる本作を書しも自筆のさま形を模されしもの
ハ後世に書しかかけりとも其ままそのまれとはかりおもて
後ゆえこれをもつてこれを貫之の自筆ハ定家卿の時になくなりゆく
其おもしらく今の世の人の家に貫しがき字形して不知
するハおもへしてまことのかたち定家卿乃此まてハ見しも自筆をもはなし
とるしく其中の大き図をおもしく貫之の本ハ今ハ絶ぬ
定家のなき老人ならびに見えたる其ふ書法ハかくのごとく
字様なり今の世の校本ハ似すよその本に似せず定家卿の本にハ今ハ
かかるよう八条殿へまいらせたるものにそ○万治之年の刊本ハ本
よみに真字にまじりて書かれ又妙寿院本より一奥をとりて土
左日記以貫之自筆本故将軍舊物料の自宮や今於ゝ自小河坊

府借写之遂一覧依或人数寄深切書之士代仮字猶蝌斗未定悪臨
写有魯魚之乎後見筆察之而已明應壬子仲秋候亜槐藤原
とゝ妙寿院と惺窩先生のうし

土

佐日記附注 一巻 三本 人見卜幽
巻首に紀氏の系図官位のうた并に直春の貫之の伝と
のせ次に貫之作の新撰和歌集の序大井川行幸和歌の序など
載せり凡例ニいへる余適見友お相つとふ本以此為拠とゝ自
序ニ得惺窩翁手筆之本又以別本換其同異粗解釈之
とゝ又読耕斎林氏の序あり○此書のかた并に宣長のいけ
この御じくら此日記のほんなど季吟のおのれ世にあるく
ひろまりくるの附注よりつぎのいふきおもきる人いしく
よおそうし此二川おんいちをせし季吟のおよびいふどもハいう
づる抄川よりうもかくそのほか外をもとりて此附注よりかうき
なるさハひろうる附注はいかにりけるの注ハ抄中にて伯は

のちに此跋に万治四年としるせり季吟翁の流布本ハ同じ
万治四年にしるせしをつとくかはしらさりしに
土佐日記抄 二巻 北村季吟著
巻首に此書題号の京極黄門の奥書妙寿院の奥書
とのせ巻末に季吟しるしたる跋を附す
此ハもろこしやハなとあさましき仏の川とのよしかきたる本六
寛文元年八月刊行す
土佐日記首書 二巻
此書作者の名詳ならず宝永四年五月刊行す
土佐日記注 写本 一巻 とよたかへ万伎
宇万伎ハ賀茂真淵のつくし注釈をくはしくしるし季吟の抄
とも用ひたるなりしが跋にいく明和五年七月廿日に書とて
しるしけり一本ハ宇万伎の門人上田秋成先生の奥書ありて
とあり一巻に慎る此日記諸本の異本をもあつめ備

以上土佐の註釈どもをあげたり
須磨記 写本 一巻
菅家の御作といひて世にひろまりたるものなり
おほかたこれを菅神はじめしるし給ひしものとなん
までのなのれまくしるしけりひとしれず書かせるものなれ
ど偽作なりとしるけれどやひとの白大夫などの名をあ
○桂秋斎からびやおのづから故実の考作りしを世に須磨記と共
ものほり菅公の御自撰となりしや作り出せし子久しく
此書よりうひまされどかならず探求しかりしはつきりし
ものおもひさ其はそろひてぬるにまづ見へてもしらぬ偽書に
くはしく人の信ずるものを見つけ代々伝来りぬ○伴蒿蹊など
世に此須磨記をしく菅神作りしへおそれますます
らせたすつることのことを依ハさつねどもろ此ますます固陋なり
○本居宣長ぬしのすすむ須磨記といふのかたハや世にしれ

ごとくなれバまことにあはれなることにてはべる
とやらん

松島日記　写本　一巻

清少納言の作といへる須磨記と同じく世にかくしつたへて
めでたきものにいひなせどもつたへしものなれバそれをそれと侍る
言が事を老く桜よおもひ出るをなどいふはいかなる人の記にやとて
これらの記をもあつめてそのとの一冊あつめてめでたしとおぼしく入り
よろしからぬじを侍るもくちをしけれどもなかなかにかきうつしたるも
のなり　これハ両々ニ古学ものすなるの作者のことをしらずといひつつ
我らすくなく世をすぐすを　ぎよ語はきこえ侍るに一言かたりつくさんとて
ひのうへ春のうへそのことをよすがといふ　一ツにかきつけ侍るに
かくしだすとも世の人のおもしろきこと　千々にいかなるものかは
なにといふ人のみるに　まことにかなふことかハ
そのことはいづれとなきにしもあらず　なかなかそれとまことのみ

あらぬことに世ハ世にいはれどもはげんとはおもふかひこそおもひ
おくつらしやのかたへハともくまうでいづる
しるさきくにきの記を世の中よめたりけるさうしをかきつけしも
じうぶのそのさうしぞめでたしとかなりけるのかしぬがたきさうし
ぞんじぐしるえしもへきとなれバ、

十六夜記　一巻　阿佛尼

阿佛尼ハ安嘉門院の四条といひし女房也。為家卿の後妻なり。為家の没
後ニ播州細川の庄を為相卿の兄為氏卿と争ふ。為相の母ゆへに、為
相の母阿仏尼訴訟のため鎌倉へ下りける時の記なり。されど
しめは東にくだりしより稿をおこして、今日ハ十六日の夜なりけりとかき
出されたるより、いざよひの記とよバれしといふ。此記扶桑拾葉集
にも収められたり

長明道の記　一巻

此記のはじめに仁治三年八月十日ごろ長明の鎌倉

下つかたは建暦元年よりくに治三年八十二年おくれて巻末に
東鑑附して長明の事を載せたれど正しく此記は源親行が
東関記行なるを人あやまりて混ずるなり

長明海道記　一巻　二本

これも長明の作といへり。ずいぶん西惟中に鴨長明が海道の記世
挙て長明が作とおもへり。いづれも口決しれ夫木抄の中にも此
ものの詞いれられね故にこれ源光行が記の詞と考へ

東関記行　一巻　源親行

又東関紀行ともいへり
これは扶桑拾葉集にも収めし流布する本の長
明の作とするはあやまりなり

藤川の記　二巻　一条兼良公

一名は藤河記行といふ兼良公應仁の乱を避て南都に住
たまひし時の作のよしなり

宗長西国紀行　一巻　写本

宗長法師が文明十二年周防の山口へ下りし時の記なり一本筑紫
回国記行と標せり○此記行は宗祇の作とすれば誤なり

廻国雑記　一巻　准后道興親王

一名宗祇回国記と号して印行す一本にはうち法源杜多の序
文を附けたるもあり誤なりこれは准后道興の作なり其中
御作は一人にもならず

正広日記　写本　一巻

正広は徹書記の弟子なり此日記は文明五年駿河より下
りし時の記なり

時まつりぬのつし　写本　一巻

善光院義教公富士御覧の時の記の供奉せし今川範
政の孫今川義忠の家に伝りしを正広法師写
しして序をくはへて時まつりぬのつしとなづけしよし

身延記行　二巻　深草元政

元政上人八十餘歳の母に付そひて身延山へまうでられし
ほどの記なり道すがらの名所旧跡殊に詳しくしるされ
たるものなり

鎌倉記行　一巻　澤菴和尚

鎌倉遊行のとき歴代の変遷を感じ専ら五山の衰廃
せしをなげき記して詩などをも載

温泉遊草　深草元政

元政摂州有馬へ下りし時温泉の記其外詩文和歌を
のせたり

春の曙　一巻　烏丸光廣卿

寛永乙亥のとし烏丸大納言光廣卿関東下向の旅の記な
り記の奥に二月の比花さく曙を故と有しよりいふなり
又ある人ちかく二条左相府春のあけぼのと名づけ給へり

窓の曙　二巻　似雲法師

享保十五庚戌のとし似雲法師の富士山の詩に見えしかば
しらせん東河五一郎の志にもとづきしひとたび伊豆の三嶋なる望
見のためにとて道の記十月十日に都をいでて洛
西嵯峨の草菴をいでゝ東のかたへおもむき伊豆の国をめぐり
ける時の記なり
くれくれ見しもおほくまなびおぼえたる事あまたあり
其中にも殊にめづらしくおもしろきは千秋のかずのことに
ふれて見るにつけきゝにつけて其をりふしの事ども
春よりの事を歌にもよみてかつは心のなぐさみともし
これを記してしるし置けるよしなり

うち出の浜の記　写本　一巻　烏丸光栄公

延享三年光栄公関東下向の道の記なり 巻首より
あられ給ひける旅八月二日みやこを出たち九月九日江戸につきてのちまて
しるし給ひける日なみのくさぐさをかきつけられたり

修学院御幸宸記 写本 一巻 霊元法皇
享保六年十月同七年壬三月同年九月同八年四月同
年九月同九年八月同年九月同十年四月同年九月同年
十月同十一年四月以上十一箇度修学院の別荘御幸の記を
御しるしおかせられたるなり

道ゆきぶり 写本 一巻 賀茂真淵
真淵江戸より故郷の遠江国浜松へいたりし時の紀行なり 遠江
西帰と標して京より遠江へいたりし時の記行を附す けれど
八月すゑの古記録を書抜引て記るしつけたるなり

菅笠日記 二巻 本居宣長
明和九年の春宣長吉野の花みの旅なりしをりのことをしるせるなり

きこえし此巻たかきことなり

東奥紀行 一巻 長久保赤水
水戸の長赤水の奥州の紀行なり 陸奥へくだりけるついでに
所の標はあまた記中にみえ松島のすぐれたるけしきのさま詳にしるし又図をあらはし
より奥より北越を廻りたる記なり とほくその図とをのせ
す○附書 多賀城碑 壺碑 御島碑 燕沢碑 野州那須
郡国造碑等の図記釈文等をつまびらかにしるす 寛政四年十
二月刻す

詞林意行集 六巻 宮川一翠子
紀行の文を東西南北によせて和文漢文にかかはらず
諸稿本をものせり
巻之一 東方 都のつと 藤原宗久
巻之二 小島のすさみ 二条良基公

宗祇終焉記 柴屋宗長

巻之三
東國陣道記　細川幽斎
巻之四
石山記行　沢庵和尚
東山道ノ記行　那波乃赤
東行雑詩　平岩仙桂
遊醍醐寺詩　卓山元政
膳所記行詩　菅原玄同
巻之五　西南方
自尾州熱田至藝陽廣島紀行　寺　梁南和尚
藝陽道行詩　石川丈山
遊有馬温泉記行　松永昌三
遊有馬温泉記　杏庵正意
南行ノ序　那波乃赤

東道の記　仁和寺宮
東関ノ記　沢庵和尚
石山ノ記行　西三条実条公
石山詣の記　松永貞徳
江府記行　小出栄庵
江東吟稿　同
遊神明山記　雪堂居士
和石州山以藝陽途中ノ詩　林道春
同和　菅原玄同
南州ノ記行　宏昌琳
南行ノ詩　大秀和尚

吉野ノ記　加藤磐斎
巻之六　北方
甲辰ノ記行　同
大原ノ記　右京大夫
大原ノ和歌　丈川一翠子

拾遺
遺塵行集　一巻
厳島詣ノ日記　今川了俊
吉野詣記　西三条公條公
今は山水ノ記　山崎政長

隠岐ノ記行　水無瀬氏成
渭北吟稿　平岩仙桂
丹後江上順遊日録　和田宗允
大原ノ記行　詩　仙桂　歌　磐斎
南遊ノ詩　同上　東庵和尚
乙巳行記　平岩仙桂

和書門 類
八九四九 號
一二三 函
七 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
八九四九 號
六 冊
二三一 函
一九 架